
偶然壊された世界で

春谷公彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偶然壊された世界で

【Nコード】

N5361Y

【作者名】

春谷公彦

【あらすじ】

少年・高木一人は突然、日常から追い出された。偶然得た異能、それが当たり前のようにある世界。昨日と同じ世界にいるはずなのに、見えるのは昨日とは違う世界。押し付けられたこの新たな日常は否応なしに進んでいく。

第一話 サイコロの一

例えば、仏のように優しい先生がいたとしよう。授業中寝ていても怒らない、テストは馬鹿みたいに簡単。しかし、その先生がいつまでも仏でいるという保証はどこにあるのだろうか。堪忍袋の緒が切れて、授業中に寝ていた生徒を容赦なく落第させ、テストは鬼のように難しくなる、ということは有り得ないわけではない。むしろ、その可能性の方が高いかもしれない。生徒はいつ暴落するかかわからない株よりも遥かに不確かな確率にすがっているのだ。

例えば、一年間のうちに交通事故にあう確率は〇・九パーセントであるという統計がある。これを見ると、事故にあう確率などたかがしれているかもしれない。しかし、あくまでそれは確率論である。賽の目が当たってしまったえば呆気なく事故にあい、場合によっては死に至る。

余談ではあるが（極論を言うところで論じていることすべてが余談なのだが）、一年間に事故にあわない確率は九九・一パーセント。これを人生八十年と仮定して八十乗すると、ほぼ半分。二人に一人は一生のうちに事故にあってしまう。

他にも宝くじ、癌、リストラ。自分には縁がないと思っていても、それが確率的に非常に低いものであったとしても、ゼロではない以上自分の身に降りかかり得るのである。

これは自分たちの身近な生活圏に留まらない。もしかしたら、一九九九年に世界は滅んでいたかもしれないし、二〇〇〇年にコンピュータが使い物にならなくなっていたかもしれない（これを回避したのは人間の努力によるものではあるが）。ただ単に確率的に外れただけの事で、十分に起こり得たことである。

二〇一二年に世界は滅ぶかもしれない。二一一二年に猫型ロボットが誕生するかもしれない。誰かが勝手に何の根拠もなく述べたことであっても、それが確実に起こらないと誰が証明できようか。（

もちろん、確実に起こると証明するほうが格段に困難であることは考えるまでもないのだが)

明日には首相が暗殺されるかもしれない。一年後には相対性理論が覆されるかもしれない。十年後にはヒ素を食べる人間が出てくるかもしれない。

どんなに馬鹿馬鹿しくても、あるいは有り得そうでも、それは数字上の問題でしかない。仮にサイコロが六面中五面が六であったとしても、一が出ることは有り得るのである。六分の一というのは相対的に高い確率である。そして、それはどんなことにも当てはまる。つまり。

目の前で、人間が人間を何の道具も使わずに焼き殺していても、それは十分に可能性の範疇なのである。

「はあ、はっ……はあっ」

少年、高木一人は走っていた。逃げていた。人間から、脅威から、恐怖から。

それはあまりにも偶然過ぎた。たまたま友人と遊んでいて帰りが遅くなっただけだ。ただ単に気が向いて、いつもとは別の道から帰ろうと思っただけだ。何の気なしに河川敷を通っただけだった。偶然がいくつか重なっただけにすぎなかった。

そこは薄暗く人通りの少ない道で、舗装されているが狭く、道の両端には木々が生い茂り死角の多い場所だった。この河川敷は概ね

そのような道が延々と続いている。

そこで信じられない光景を一人は見てしまった。

人が、人を、殺している。

こう言ってしまうのはあまりに不自然だが、それだけなら納得できたかもしれない。死角に隠れ息を潜め、犯人が立ち去るのを待ち、逃げ帰って警察に電話すればよいだけのことだ。被害者には気の毒だともう間に合わない。

しかし、それでは収まらなかった。

人が、人を、焼き殺している。

何度も言うが、不自然ではある。だが、これも結局は同じことであつたはずだ。灯油をかけて火をつければ、人間は呆気なく燃える。死ぬ。犯人がいなくなった後で警察に電話すればよいだけのことに変わりはない。

だが、しかし。

人が、人を、道具も使わずに、焼き殺している。

これも極論を言えば、同じことである。何とかやり過ごせばいいだけのこと。それが彼に与えられた選択肢のなかで安全に生還することができるもつとも確率の高い方法だった。だが、彼はその光景が彼のの常識を遥かに逸していたためにその選択肢を取ることができなかった。ただ、今現在、第三者がいたとすれば、本人の意思とは関係なくその場を動けずにいたためにその選択肢を取っているようには見えただろう。

夢だと思いたかった。だが、夢を現実と思い込んだことはあつたが、現実を夢だと思い込んだことはないし、これが現実だということも自覚していた。

上下スウェットでだらしなく髪の伸びた男が相手の頭を鷲掴みにしている。そこからあろうことか、炎が噴き出し相手の体を包み込んだ。聞くに堪えない叫び声をあげてその人は呆気なく死んだ。真っ黒なケシ炭になったのだ。

真っ赤に燃えるその色が、常軌を逸したその光景が、一人の脳裏

に焼きつく。火……身近なものだ。飯を食うには必要不可欠で、煙草を吸う人なら、口元すれすれまでそれを持つてくる。それほどまで近い存在。

それが、こんなにも遠くて、残虐で、残酷なものだとは思っていなかった。放火などのニュースを見ていても実感できなかった感情が一人の体に湧き上がってくる。

鼻につく肉の焼ける臭い。人間の肉が焼ける臭いは初めてだった。「うっ……」

嗚咽感がこみ上げてくる。

あまりに信じられない状況に一人の思考は停止していた。脳の信号が渋滞を起こし、感覚が麻痺する。立っているという自覚も感じられずにただそこにいるのが精一杯だった。

ついには、一人の体が震えだす。恐怖や脅威といった様々な負の感情がふつつつと湧いてきた。

そして、膝が笑いだす。顔は引き攣り笑顔などないが、膝は、何がおかしいのかというほど笑っている。笑うなど自らに訴えかけてみても、無駄だった。

「……あ」

前触れもなく、完全に力が入らなくなつて、その場に尻餅をついた。もちろん周りの草木はガサガサと音を立てるし、もちろん犯人にも聞こえただろう。ここでもっとも安全だった選択肢を彼自身が消してしまった。

犯人は声を上げなかった。そのため、気が付かれたかどうか瞬時にはわからなかった。だが、声の代わりに、男が一步踏み出した音が聞こえた。それは、やけに大きく聞こえた。その音は確かに一人の方に向かっていた。

体が動かない。力が入らない。手足が震える。

動け、動け……！

動かなくては、逃げなければ、間違ひなく殺される。

「……動、けっ！！」

自らの体を叱咤し、一人は跳ぶように立ち上がった。

やっこのことで体の制御権を取り戻した一人は相手を確認することなく、走り出した。同時に男の足音が早くなったのが聞こえた。

走った。ひたすら走った。追いつかれまいと走った。追いつかれれば殺される。考えるまでもなかった。

一度だけ後ろを振り向いた。まるで適当に鬼ごっこをしているのかと思えるような、つまり、まるでランニングでもしているかのよう、軽々と余裕を持って走っているように思えた。いつでもお前くらい殺せるぞ、そう言っているかのようで、一人の恐怖心を一層煽る。

「そうだっ！」

一人は一つの策を思いつく。というよりも、なぜそう考えなかったのだろうと思ってしまうほどのものだ。この河川敷は平行する道路よりも五メートルほど低くなっているが、その道路は大きいもので、人通りこそ少ないものの車の交通量は多い。道路までの五メートルは階段以外は急な坂だが上れないことはない。

道路に出さえすれば……。出さえすればいくら殺人鬼と言ってもやすやすと犯行に及ばないだろう。

一人は進路を右に変え、芝状の坂を上り始める。

ところが。

「……あっ!？」

夜露のせい、見事なまでにスリップして一人は芝の上にうつ伏せになる。

追っていた男の足音もゆっくりになり、近くなる。一人は恐怖のあまり、うつ伏せになったまま相手を確認することもできない。自分の鼓動だけがやたらと大きく聞こえた。走ったための汗のほかに恐怖からくる冷や汗が混じっているのがわかった。

万事休すとはこういったことを言うのだろう。

やがて足音が止まる。

ゆっくりと手が伸びている、気がする。

掴まれば先ほどの人と同じように黒焦げの炭になってしまう。死にたくない。

助けて。

誰か。

お願いだ……。

願ってみても状況は変わりはないだろうことはわかりきっていた。

一人は死を覚悟した。

刹那、冷たい空気を感じた。

静かだった周りが、さらに静かになった気がした。

一人は恐るおそる首だけを回して振り返った。

男が、氷漬けにされていた。

氷の彫刻のように真っ白になっていた。氷の結晶の中に人が入っているようにも思える。

右手は一人の寸前まで伸ばされ、表情は不気味なほどに悦びに満ちている。それが、時間が止まったかのように、まるで芸術品のように動かないでいる。

その後ろには、また違う男が立っていた。

ツンツンの頭に鋭い眼光、無精髭に頬には切り傷。筋骨隆々とま

では行かないが十分すぎるほどの体軀。服装こそスーツを無難に着こなしているものの、正直堅気の人間には見えなかった。

「おう、大丈夫か少年」

その顔と見事にマッチングした想像通りの低い声。幸いだったのは、思った以上に棘のない口調だろうか。それでも一人を委縮させるのには十分だった。

「よかったな、面倒くせえことにならなくて」

そう言うとも男は胸ポケットから煙草を取り出しライターで火を点けようと試みる。だが、ライターはオイル切れらしく、むなしく小さな火花を散らすだけだった。

「ちっ、面倒くせえ。どうせなら最後にコイツに火、もらっておけばよかったな」

男はライターを投げ捨てる。その様子を一人は呆然と見つめる。

「あ？ ああ、見たからな。コイツが殺ったやつ。面倒くせえ、あれじゃ男か女もわかりやしねえ。ん？ ちげえよ。そりゃ助けたかったよ。見殺しにしたわけじゃねえ。俺が来たときはもう遅かった。残念だな」

男はべらべらとまくし立てるが、正直なところ、一人は彼の言っている意味がほとんどわからなかった。ただ、男から目線をはずさずにいた。

彼は自分を助けてくれた。だからといって気を許していいとは思えない。彼も、常識では考えられないことをやってのけている。人を氷漬けにしているのだ。そもそも、助けたのは結果論であって、助ける気はなかったかもしれない。

一度は落ち着いた得体の知れない恐怖が再びこみ上げてくる。

「つと。最後の仕事だ。悪く思うなよ、少年」

「え？」

「つつても、覚えてはもらえねえけどな」

男は怪しげな笑みを零す。そしてポケットから別のライターのようなものを出す。

「ああ。これ、ライターじゃねえよ。って、あれ？」

男は上半身だけ起こした一人の顔にそのライター状のものを近づけるが、それは先ほどのライターと同じくカチカチと小さな音を立てるだけで、何も起こらなかった。

「マジかよ……。面倒くせ、ぶっ!!」

一人は起き上がり右足を振り上げて男の顎にクリーンヒットさせた。男は豪快に倒れこむ。その隙を突いて、坂を駆け上り、道路へと出た。

「あ、おい！」

不意をつかれ倒れこんだ男はすぐさま起き上がり、少年の後を追うように道路へと出たが、それだけだった。そしてポケットに手を突っ込んで呟いた。

「ああ、面倒くせえ……」

第二話 鳴らない目覚まし

さて、普通、人は朝起きるときにはどうやって起きるだろうか。何も使わずに起きられる？ それは素晴らしい。是非とも真似したいものだ。

親に起こしてもらおう？ ちょっと甘えすぎやしないか。そろそろ自立してみよう。

目覚まし時計を使う？ うん、それが一番無難だ。最近は携帯電話のアラームを使う人も多いだろう。どちらにせよ一緒のことだ。この方法が大多数だろう。

さて、ここで第二問。前日、何があったか知らないが、帰ってくるなり全身に疲れがどっと出て、目覚まし時計もセットせずにそのままベッドに倒れこんでしまったらどうなるだろうか？

答えは――――

「一人！！ いつまで寝てるの！？」

一階から母親の声がする。怒っているようにも聞こえる。

「……ん、う……ん」

一人は寝返りを打つ。そして母の声に反応してゆっくりと目を開く。布団は剥ぎ取られ、ベッドの端にかろうじて乗っかっている状態であった。いつものことながら寝相の悪さが見て取れるのだが、逆にどうやってベッドから落ちずにいられたのかと自分でも思ってしまうほどだった。

時刻を確認しようとするが、机の上に置いてある目覚まし時計はベッドに寝たままでは角度的に見えない。起きようとは思えなかったので、仕方なく向きを変えて壁に掛けてある時計を確認する。

八時十五分。

急に頭が覚醒してくる。行動予定、目的地、所要時間、大した量ではないとはいえ、自分でも驚くほどのスピードでそれが計算でき

た。

朝のホームルームは八時半からで、学校までは自転車です。五分で準備ができればぎりぎり間に合うかどうかというところだ。つまり、この寝坊である。どうせなら潔く諦められるほどの時間に起きてみたかったと思わなくもない。

「起こすならもっと早く起こしてくれ！」

部屋の外に聞こえない程度に叫び、急いで飛び起き、着替えようとする。だが、自分がグレイのチェック柄のスラックスに紺のブレザー、つまり制服を着たままであることに気づく。昨夜はそのまま眠ってしまったようだ。

寝汗をかいだYシャツは気持ち悪いが、着替えている余裕はない。どうして、そのまま寝てしまったのか、目覚まし時計が鳴らなかったのか……。余裕はないはずなのにそんなことを考えてしまった。

「……あ」

そして昨夜の惨状を思い出した。人が人に焼き殺され、殺した人がまた別の人に凍死させられ、そして自分が襲われそうになった。果たして、このまま学校へ行ってもよいのだろうか。自分は相手の顔を見ているのだ。向こうからすれば放っておく訳がない。登校中に襲われるかもしれない。学校で襲われるかもしれない。

どうすればいい？ 警察に……。いや、馬鹿馬鹿しいと一蹴されて終わりだろう。

いや、ちょっと待て――

「一人！！ まだ寝てるの？ いい加減に……」

「わかってるよ！ すぐ行くよ！」

そう、馬鹿馬鹿しい。有り得ない。人が燃えた？ 人が凍った？ そんなことあるはずがない。昨日は友人と遊びすぎて疲れてそのまま寝てしまったんだ。悪い夢でも見たんだ。昨夜は夢と現実がどうとか考えていた気もするが、夢の中では現実だと思っているのだから抵抗しようがないのは当然だ。

「それでも夢と現実の区別くらいつくと思ってただけだな……」

一人は呟く。ゲームのしすぎかな、と自分を戒め、とりあえずYシャツを替えよう、と思った。

一人は自転車を思いっきりこいでいた。日は高くなりつつあるが、風はまだ肌寒い。そんな春の気候を全身に受け、一人は自転車をこぐ。ホームルームは間に合わなかったが、一時限目には間に合わせたい。

普段一人は徒歩通学である。理由は特にない。強いて言えば別に急いで登校する必要も急いで下校する必要もないから、とでもなるうか。忙しい世の中への小さな反抗である。

ただ、今日はそうも言っていられない。別段真面目な生徒であるつもりではないが、遅刻やサボりは嫌だった。授業を一度休むと、朝に歯を磨かなかったような、そんな不快感に襲われるのだ。そういえば、今日は歯を磨いていない……。これももちろん不快だ。

それにしても、いつも自転車で登校していれば、昨日のように放課後に直接友人と遊んで、徒歩で帰ることなどなかったのに。自転車があれば昨日のような――

「だ、か、ら!!!」

あれは夢だったのだ。そう自分で納得したではないか。馬鹿馬鹿しい。

一人は自転車をこぎ続けた。

昨日の（夢だ!）川沿い通りより一本住宅地側にある道路、通称バス通りを真っ直ぐに徒歩二十分、自転車十分。それが一人の通学路である。中規模の公園が一つと、宗派はわからないが庭の桜が綺麗な寺が一つ、それ以外は文字通り住宅しかない。

漫画などであれば、通学路に商店街があったりして、駄菓子屋のおばちゃんが親切だったりするものだが、あいにくコンビニすらない。

真っ直ぐに、何にも目移りすることなく、一人は学校へと到着し

た。時刻は八時三十五分。一時限目は四十五分からなので、ようやくゆつくりできる。どうせホームルームには間に合わない。

自転車を駐輪場に止め、籠から学生鞆を取出して歩き出す。

稲宮高等学校。駅から徒歩二十分ほどという微妙な立地だが、市内に数十ある高校の内、学力的には上から数えた方が早い、割と進学校と呼べる公立高校である。一方、部活動といえば、下から数えた方が少しは早いかな、というくらいの中堅校の下くらいである。もちろん、部活動によって差はある。ただ、総括すると、お世辞にも強豪の仲間入りは無理そうである。

伝統ある古い学校でもないし、最近できた新しい学校でもない。別に際立った行事があるわけでもないし、校則も、厳しいとは言われているが、内に入ってしまったえばなんてことはない。どこの学校でもそうだろうが、携帯電話の持込を禁止したところで、守る生徒などいないし、たいていは見つからないのだ。それを外から見るときに厳しいと見えるかどうか、である。

授業にも間に合う時間なので急ぐことなく玄関で上靴に履き替え、歩いて階段を上る。さすがに人は少なかった。同じように遅刻したらしい生徒が数名いただけである。

三階が一人の在籍する二年次の階である。大体のクラスはホームルームが終わっているようだが、一時限目がすぐに始まるので廊下に出ている生徒は少ない。

遅刻した場合はまず職員室に行かなければいけない気もしたが、遅刻をしたことがないので一人は覚えていなかった。後でどうでもなるだろうと彼は自分のクラス、二年三組の教室の後ろのドアを開けた。扉の音につられてクラスの大半が振り返った。

「お、珍しいな。お前が遅刻なんて」

廊下側から二番目、後ろから二番目と、なかなかおいしいポジションとも思える席に座る眼鏡の男が話しかけてきた。

佐野良介。一人とは高校からの友人なので一年と少しの付き合いだが一緒にいることの多い男である。昨夜ももうひとりと三人で駅

前のゲームセンターで遊んでいた。

「目覚ましが鳴らなかった」

そう答えると一人は自分の席へと歩き出す。すると後ろからドタドタと足音が聞こえてきた。

「ギリギリセーフ!! 痛っ!!」

後ろから走ってきた少女は中を確認することなく教室に走りこんできた。そのせいで、入り口にいた一人と衝突し、不意を突かれた一人はバランスを崩し、隅にあった掃除用具入れに頭をぶつけることとなった。

クラス中がどっと笑いに包まれた。心配の声がないあたりがなんとも切ない。

「いたた……。あ、一人、おはよう!。一人も遅刻?」

ツインテールの少女は尻餅をついたが、すぐに起き上がって、一人に挨拶をする。あはは、と笑いながら尋ねる様を見ると謝る気はなさそうである。

「花梨、てめえ……。まず、謝りやがれ!」

果山花梨、一人の幼馴染である。寝坊・遅刻の常習犯。ツインテールが特徴的で、一部男子に人気があるとかないとか。花梨はどういう意味か笑顔を見せるとそのまま、自分の席へと向かった。

「こ、の……!」

「やめとけ、いつものことだろ」

良介が嗜める。一人のほうは見ず、参考書を読みながらではあるが。「手、出したら負けだぞ」

「言われなくてもそんならわかってるっつーの」

そう言って、一人は窓際一番後ろの席に座る。お気に入りの席である。できることならもう席替えはしたくないと思えるほどのベストポジションだ。

一人の一つ前に座っている男が振り返った。「よお、相変わらず朝っぱらから騒々しいな、お前ら」

「うるせえな。お前ら、って言うな。騒がしいのは花梨だけだ」

「ま、どっちでもいいけどな。用具入れに頭ぶつけたときのお前の顔、傑作」

男はこらえるような笑みを見せた。

「おい、太一。今度はお前がぶつかってみるか？」

一人は唸るような低い声で彼に言う。

西村太一。昨日遊んでいたもうひとりである。小学校が一緒に、中学の時に転校していったのだが、高校でまた一緒になったという、なかなかの腐れ縁である。

「よせよお。お前本気でやりそうだからな」

一人以上にツンツンの頭を振って太一は言う。

もちろん、本気以上の力でぶつける気である。

授業とは、勉強をする時間である。教師という、勉強を教える側が一人と、生徒という勉強を教わる側が多数。生徒とはお金を払ってまで勉強したいと思っている人間であるはずである。たいていは親が払っているのだが。最近は何が払ってくれるようになった。

だからだろうか、こういう生徒もいる。「授業は昼寝の時間だ」思っているかどうかは別として、授業中に寝てしまう生徒は少なくない。おそらく一時間何もするなと言われれば、退屈でありながらも眠ることはできないかもしれない。それが授業の形式を取っただけで用意に眠れてしまうのはどうしてだろうか。授業という形態が、人間の長い歴史にわたって、催眠効果を催すものであると人間の遺伝子に組み込まれているとしか思えない。

話は逸れたが、要するに、一人は授業中に眠ってしまうような人間なのである。授業をサポートしたりして休みたくないと思いつつも、いざ授業となると熟練の催眠術師の術中にはまってしまふのである。このように内容よりも参加することに価値を見出している輩が他にも多数いると一人は自分に言い訳していた。

午前中の四つの授業の内、どれだけを睡眠に費やしただろうか。さらに、四時限目が終わっても一人は机に突っ伏していた。

豪快に眠る一人の頭に分厚い参考書が降りかかる。それはコツンと心地よい音を立てた。

一人は頭をさすりながら、ぜんまい仕掛けの人形のようにゆっくりと上半身を起こす。あたりを見渡して自分の頭を叩いた犯人を探した。そして片手に参考書を持っている良介を睨みつけた。そしてそれを見て笑っている太一も睨みつける。太一には一割増しの睨みをプレゼントした。

「ほら、飯買いに行くんだろ？ 無くなるぞ」

一人の睨みなどものともせずに良介が口にする。見た目通りに冷静な人間である。眼鏡キャラは伊達ではないということだ。

「うい」

一人は風船から漏れた空気のような声を出した。それほどに眠いのである。

「そんなに眠いなら寝てていいぞ。俺が買ってきてやつから」

太一が立ち上がる。が、それに反応して一人はスイッチが入ったかのように立ち上がった。

「お前が買ってくるろくな物じゃないだろ」

「あたぼうよ！ ろくじゃない物を選んでるんだからなっ」

そう言った瞬間に一人の右ストレートが太一を襲う。それを予測していたかのように太一は身を屈めて避ける。だが、一人はそのまま太一の頭を掴んで机に押し付けた。もちろん、軽くである。それでも顎をぶつけた太一が悶絶する。

「行くぞ、良介」

太一に構うことなく背を向けて教室を出ようとする一人。

「……気の毒に」

哀れみの視線を太一に送ると良介もそれに続く。もったも、いつものことなので哀れみの量もたいしたものではない。

「ちょ、ちよっと待てよお」

顎を押さえながら慌てて後を追う太一。

三人で教室を出ようとしたところだった。

「あ、一人？」

教室の真ん中あたりで友人と昼食をとっている花梨が一人に話しかけた。

「あん？」

「えっとさ……」

「何だよ？ はっきりしろよ」

「ジュース買ってきて！」

「パシリかよ！」

三人が出て行ったあと、花梨は下を向いてため息をついた。そして友人の遠山柑奈に頭を小突かれた。

第三話　じゃんけんひとり負け

三人は一人の机を囲んで対峙していた。

一人の机にはパンが二つ。焼きそばパンとたまごサンド。

というのも購買の競争率は高く、一人が居眠りしていたせいで出遅れてしまったのだ。残っていたのはそれだけだった。むしろそれらが残っていたのは不幸中の幸いというものだろう。

三人の人間に対して、パンが二つ。どうなるかは自明だろう。

最初は出遅れた一人に罪をなすりつけようとした良介と太一だったが、一人がそれで引き下がるはずがない。それゆえ対峙し、精神を統一しているのだ。

「……行くぞ」

一人が静かに告げる。

「ああ」

「おうよ」

決戦の狼煙が今上がった。

「出さなきゃ負けよっ！　最初はグー！　ジャンケン、しょー！！」

一人はグー。そして二人は、パー。

「うおお！？」

「相変わらず弱いな」

良介が右手で眼鏡を直しながら勝ち誇った表情で言う。

「くそっ」

「因果応報ってやつだよ」

太一が笑いながらそっと焼きそばパンに手を伸ばすが、良介にしっかりと阻まれていた。

本当に意味を知っているのか？　と太一に対して思っても、一人は何も言い返せずに拗ねるように自分の席に座った。良介と太一がどちらを食べるかを争って再びジャンケンをしているが、それを見るのも癪なので、不貞腐れて窓の外を見ていた。

ふと、高級そうな車が学校に入ってくるのが見えた。

「すつげえ車……」

一人が漏らす。それを聞いて勝ち誇っていた太一と少し悔しそうな良介がつられて外を見る。

「何あれ、すげえ。フェラーリ？」

一人は言った。太一がもの珍しそうに窓に張り付くように身を乗り出していた。窓を開けるには少々寒い。

「青いフェラーリなんてあるか？　フェラーリって赤じゃないのか？」

「へえ。いや、高そうな車って言ったらフェラーリかなって。良介、お前詳しいのな」

「このくらいじゃ詳しいって言わないよ」

一歩引いて見ている良介の表情を一人は覗いた。これ以上の知識があるわけではなさそうだった。

「まあ、別にどっちでもいいんだけどよ」

一人は再び車に目を向ける。左のドアから出てきたのは女。どう見てもそちらにハンドルがついている。フェラーリでなくとも外車であることは間違いないようだ。彼女は赤いド派手なスーツを着て長い髪を揺らしている。三階からではよくわからないが、おそらく美人だろう。もしくは美人でもないのに派手な格好をする勇気のある肝っ玉か。

そんなどうでもよいことを考えていたが、右から出てきた人物を見て、背筋が凍るような思いがした。冷たい水に突っ込まれたような、いや、それでは足りない。真冬の湖にでも突っ込まれたような、そんな寒気がした。

女の方はよく見えなかったが、それは初めてみる顔だからだ。一度見た顔なら三階からでも割とわかる。

無精髭に頬に傷。昨日の男だ。人を殺したやつを殺した、しかも信じられないが何も使わずに凍らせたのだ。

あれは……夢じゃなかったのか？

そんな疑問に答えてくれる者はいない。ただ、頭の中で警鐘がガングンと鳴っていた。

一人はすぐさま鞆を掴むと立ち上がって駆け出した。

「おい!？」

「帰る!」

驚いた良介と太一が声を上げるが、一言そう言っただけでそのまま駆け出していった。

「……何だよあいつ」

太一が焼きそばパンをほお張りながら呟く。

「何よ、あんたたちどうしたのよ？」

一人の奇行に驚いたのは二人だけではない。クラス中の皆が注目した。いつの間にか教室は静かになっていた。その中で柑奈が代表するように尋ねた。

「知らねえよ。何か、車を見たたん出てっちまった」

「車あ!？」

柑奈と、その後を追うように花梨が窓際まで来て外を覗き込んだ。

「車ってあの青いの？」

柑奈は窓越しに車を指差す。

「ああ。あの高そうな車」

「高いの？」

「知らん。高そうじゃん」

「あの車が何だった？」

「知らねえって。一人に聞いてくれよ」

そう言うと太一は肩をすくめた。柑奈は良介とも目を合わせるが、彼も首を横に振っている。

「……一人」

花梨はひとり呟き、不安そうに外を見つめていた。車の二人組が視界から消えると、入れ替わるように一人が出て行った。

赤いスーツの女が車を降りた後、続いて傷の男が車を降りた。男は目を細め恨めしそうに校舎を眺めた。

良く言えばベージュ、あるいは単に白が黄ばんだのか、少し色のついた白い外壁。何の変哲もない校舎だ。左を向けば自転車置き場、その奥にはテニスコート。

昼休みなのか外にいても玄関から喧騒が漏れてくる。サッカーボールを持った男子の集団が校舎の裏へと走っていった。テニスコートとは反対方向だ。裏にはグラウンドがある。

「ここか……」

どういうわけか不機嫌そうに声を漏らす。

「ええ、あなたの記憶が正しければ、彼はここの制服を着ていた、ということになるわ」

女はあまり言葉に起伏を見せず、事務的な口調で言った。

「ったく。曰くつきじゃねえのか？」

「統計学的に見て、他の集団との有意差は認められないわ」

「小難しいこと言うんじゃないよ、情報課」

男は胸ポケットから煙草を取り出して口に咥えようとしたが、女に睨まれてその手を引っ込めた。公共の場での歩き煙草はもう許されない時代だった。

「私にそんな口利いていいのかしら？」

女はあくまで事務的な口調で話す。その冷たい口調のおかげか男は黙りこんだ。男は舌打ちこそしたが、それ以上何も言わなかった。

「そもそも、何で取り逃がしたのかしら？」

「置換機が空になってた」

「信じられない。減給物ね」

女はそこで初めて口調を変化させた。だが決してよいものではなく、呆れ返っている。

「ああ、だからお前を呼んだんだ。上には報告できない」

「あら、私を何だと思ってるの？ 道具だとも思ってる？」

「特命部情報課情報収集係係長、龍瀧千晴。二十八歳。女性。スリサイズは――」

「はいはい。そこまで」

龍瀧は手を叩いて制止する。

「ちゃんと人間として見てるし、れっきとした信頼できる同僚だよ」

「それはどうも。けど、別に私を連れてこなくてもよかったんじゃない？　もしかして、私ってアッシー？」

「いや、俺だって車持つてることくらい知ってるだろ」

「あのオンボロビートルを車って呼ぶのかしら？」

彼女はわざとらしく首をかしげ、鼻で笑った。このやり取りの中で一番の感情の変化である。

「最近変えた。ニュービートルだ。英断だったがな」

「じゃあ、一人で来ればよかったじゃない。情報はあげたんだから。私にだって仕事はあるのよ？」

「阿呆。俺が一人で行ったら堅気に思われんだろうが」

「ああ、なるほど」

「納得すんな、阿呆」

そう言いながら二人は生徒玄関の右にある来客用の玄関を通ろうとした。ふと、龍瀧が生徒玄関の方に目を向けて足を止めた。

「あら、サボりかしら？　感心しないわね」

「あ？」

「ほら、あれ」

そう言って彼女は指を差す。その先には慌てて駆け出す男子生徒の姿があった。彼は自転車置き場に向かってるので、昼休みに遊ぼうというわけではなさそうだった。彼は鞆を乱暴に自転車の籠に突っ込むとそのままこぎ出していった。体調不良で早退というようにも見えない。

その姿を見て男の表情が和らいだ。

「何よ、気持ち悪い」

「鴨が葱背負ってきた」

「じゃあ、あれが……。追う？」

「お前の車じゃ気づかれるだろ」

「じゃあ、どうするの？ 相手は自転車よ？」

「俺が追う」

「……見られないでね」

「俺を誰だと思ってる」

「特命部執行課課長、氷室大牙。二十九歳。男性。右利き。好きなものは甘いもの全般。嫌いなものは山葵と辛いもの。口癖は……」

「わかった、もういい。悪かった」

氷室は手をひらひらと振り、鬱陶しそうな表情を作る。そして、龍瀧に聞こえないように「面倒くせえ」と口癖を呟いた。

「自分で自分の尻拭いなんかしたかねえよ」

一人は全力で自転車をこいだ。ハンドルを強く握り、できる限りの力でペダルを踏む。行き先は特にない。遠くへ。ただ遠くへ。やつらから遠くへ。それだけを考えていた

信じられなかった。夢じゃなかった。

あの男は何者だ？ なぜ自分を追う？

追う？ 彼は自分を追っているのか？ 確証はない。だが、少な

くとも学校で一度も見たことはない。それに昨日の事件、偶然にしてはできすぎている。

ならば、やはりあの男は自分を追っているのだろう。なぜ？

同じような疑問がいくつも一人の頭を巡る。答えはない。とにかく今は、逃げなくてほ。

どこへ行こうか。家は危ない。学校がばれているのなら、家も割れていると考えた方がいいだろうか。だがそれならば朝真っ先に来るはずだろう。けれど安心はできない。

ならば、街中に行こうか。人ごみに紛れれば少しはマシかもしれない。

いや、警察に行けばいいんだ。昨日のことは信じてもらえなくとも、変なやつに追われていると言えば、保護してもらえるはずだ。よし、それでいこう。そう決めると一人はハンドルを一層強く握り締めた。

「よう、そんなに急いでどこ行くんだ？」

呼吸が止まるかと思った。心臓が高く跳ね上がる。そして、全身から血の気が引いていく。

強い力で自転車を引き止められた。

「う、わっ！」

無理やり引っ張られたせいでバランスを崩し、自転車から振り落とされるようにして、地面へと転げ落ちる。どこか擦りむいたかもしれないが、全身が痛くてわからなかった。

恐るおそる顔を上げると、そこには例の男が立っていた。右手で一人の自転車の荷台を掴んでいる。

それ以外は何も持っていなかった。周りを見渡しても何もなかった。

車も、バイクも、自転車も、何にも乗っていない。

自分の足で自転車に追いついたとでもいうのだろうか？ 適当にこいでいたわけではない。走っても追いつけないだろうスピードでこいでいたはずだ。

まさか。

有り得ない。

信じられない。

男は一人の自転車を手から放した。

「あー、一つ聞くんが、昨日のこと誰にも喋ってねえよな？」

口封じだ。一人は直感する。逃げ出しても追いつかれる。ならばと咄嗟に体が反応した。

飛び起き、間合いを詰め、相手の頭を目掛けて右足を振り出した。それを男は左手の甲で軽々と受け止める。

「あー、そうだ。昨日の顎、効いたぜ」

男は右手で顎を触りながら笑みを浮かべる、強面の顔にはやけに不気味に映った。

「うわああああ！」

右足を引っ込めると、一人は男に突進する。男はやれやれとため息をつくとひよいとそれを避ける。勢い余って一人は地面に倒れこんでしまう。

「おいおい、取って食おうって気はないぞ」

男は笑うように言った。だが、取って食わないなら、凍らして殺す気だろうと一人は思った。

男はポケットに手を突っ込んだまま一人へと歩み寄る。一人は地面に尻餅をついたまま後ずさりする。すでに対抗する気力はなかった。

来るな。

来るな。来るな。

来るな来るな来るな！！

「やめろおおおおお！！！！」

次の瞬間、一人は違う景色を見ていた。家の屋根が並んで見える。何が起こったのか全くわからない。

這い蹲るようにして屋根の端まで行って、下を見下ろすと、一人の自転車が見えた。男もいる、目が合う前に一人は体を引いた。

どうやら近くの民家の屋根に上ったらしい。

どうやって？

「おいおい、何だってんだ……？」

途端に体が重くなる。マラソンを走った後のような、それほどの気だるさを感じた。

後ろから舌打ちが聞こえた。それを聞いて我に戻るが、振り向く間もなく首に衝撃を受けた。

「あー、面倒くせえ」

一人の意識は暗転した。

第四話 はずれくじ

一人が目覚めると、まず自分が縛られていることに気づいた。足をガムテープで縛られ、手には手錠を掛けられている。

そして、次に自分が車に乗せられていることに気づく。ラジオも音楽も流れていない。普段、親の車に乗ればどちらかは必ず流れているので、それらがいないこの車ではエンジンの音がやたらと大きく聞こえた。

どうやら後部座席に横向きに寝かされているようだ。手錠は無理だとしても、足はどうにかならないかともがいてみるが、結局徒労に終わった。

立ち上がることもできないのでどこを走っているかも確認できない。だが、寝た態勢でもかろうじてビルが見えることから、高いビルがある場所、つまり街中を走っているのだという想像はついた。

「目が覚めたみたいね」

信号待ちで車が止まった際に振り向いた運転席の女が声を掛けた。ストレートの長髪に整った顔立ち、赤いスーツが目立っている。十人いたら三人くらいは「好みじゃない」と言うかも知れないが、十人が十人美人だと答えるだろう。一人も好みじゃないが美人だと思った。

「つたく、面倒くせえことしやがって」

助手席の男が言う。先ほどの男だ。子供が十人いたら十人泣き出すだろう。

一人は下になっている右腕の肘を支点にして反動をつけて無理やり起き上がった。

「どこ連れてく気だよ!？」

震える心を鼓舞して強気に言う。それを聞いて男は眉を吊り上げ、「強気だねえ」と笑った。

「もうすぐわかるわ。あと十分、誤差プラスマイナス二分で所かし

ら」

女はそれだけ言って車を発進させた。男が「細けえよ、情報課」と呟いた。一人にも聞こえたということは女にも聞こえただろう。そのせいか、それからブレーキが乱暴になった気がした。

それほど長い時間ではなかった。十分もせずに（おそらく十分マインス二分とあったところだろう）女が「ここよ」と言ったので、窓を覗きこんだ。

一人の頭にはまず疑問符が浮かんた。そして次に目の前の光景の受け入れを拒否した。その建物が子供の頃に社会科学見学で訪れた場所であり、そこが自分を今の境遇に置くとは考えられなかったからだ。

「警、察……？」

「そう、警察よ」

「あー、自己紹介が遅れたな。特命部執行課課長、氷室大牙だ」

「特命部情報課情報収集係係長の龍瀧千晴よ」

警察？ この強面が？

一人は俄かには信じられなかった。

車は地下駐車場へと入る。手際よく車を止めると、足のテープを剥がされ一人は歩く。

エレベーターに入り、龍瀧が地下のボタンを押した。

「地下駐車場の、さらに地下？」

思わず声が出る。

「ああ、新しい部署なんだよ、特命部」

「ずいぶん、待遇の悪い部署だな」

「まあ、見られてもまずいからな」

「あ？」

「じきにわかる」

「それより、俺は何の罪状なんだよ？」

彼らが警察であるとわかって一人はだいぶ落ち着いた。それと同じになぜ自分が拘束されなくてはいけないのかという怒りも沸々と

わいてきた。氷室を睨みながら尋ねる。

「あ？ 罪状なんてねえよ」

「は？」

訳もわからず、一人は手錠をかけられた両手を突き出す。たしか、何の罪状もなしに手錠をかけてはいけないはずだ。

「ああ。だってお前、暴れるだろ」

こんな適当な男が、本当に警察の者なのだろうか。

「当たり前だ！ 説明もなしに！」

「説明すりゃ、おとなしくなるのか？」

「それは……」

「まあいい。それを説明するために連れてきたんだ」

エレベーターが止まると、狭い廊下に出る。手前右の扉は開けられており、中はいたって普通の職場のように人々がデスクに向かい仕事をしていた。一人たちはそこには入らずに、廊下を進む。扉は多くない。左右の壁に二つずつ、奥に一つの計五つ。突き当たり左には自販機があり休憩所となっていた。

一人たちは突き当たりにある扉に入った。そこは小さな会議室のようで、白い壁、白い机、白い椅子にホワイトボードと白で統一されていた。角には観葉植物も置いてあった。

明るい雰囲気だったが、一人にはこの白さがかえって無機質で冷たいものを感じられた。

「何か飲むか？」

氷室が財布を取り出しながら尋ねる。

「いや、別に……」

「あ、そ」

氷室は部屋を出て行く。どうやら自分のものだけ買いに行くようだ。

龍瀧が近寄って、手錠の解錠をしてくれた。

「適当に座って」

事務的な口調で彼女は言う。冷たい印象を受けたが、これが常な

のだろうか。一人はいくつかある椅子のうち、一番扉に近い椅子に座った。二人が警察の者であるとわかっていても、出口を塞がれるのは怖かった。

氷室が缶コーヒーを片手に部屋に入ってくる。

「じゃあ、私はこれで」

龍瀧は軽く頭を下げ、部屋を後にした。

「さて、何から話そうか」

氷室は缶コーヒーのタブを空けながら、一人の向かいに座る。一人は目線を落とした。できれば目を合わせたくない顔である。

「あー、昨日は怪我なかったか？」

「……ああ」

今日は、あちこち擦り剥いたがとは言えなかった。向こうが危害を加える気がないとわかっていても反抗するのはなかなか恐ろしかった。「そうか、そりゃよかった。昨日はテンパったろ？　いきなりあんな現場に遭遇して」

「そう！　何なんだよ！　夢じゃなかったのかよ……」

一人はその話題に勢いよく噛み付いたが、最後は懇願するように、搾り出すように声を小さくしていった。完全に下を向いてしまう。

「……残念ながらな」

「何なんだよ、あれ……」

「これのことか？」

急に部屋の温度が下がった気がした。驚いて顔を上げると、氷室が缶コーヒーに手をかざしている。その缶コーヒーは見る見るうちに凍っていき、すぐに氷の塊となった。

一人はやはり信じられなかった。昨日の記憶が焼きついていようと、目の前でそれが起きようとも、夢を見ているとしか思えなかった。有り得ない。

一人は何も言えなかった。

「これに名前はない。みんな適当に”能力”とか”異能”とかって呼んでいる。能力には個人差があって、火を出すやつもいれば俺み

たいに物を凍らすやつ、物を自由に浮かせたり動かしたりするやつ……。色々だ」

「信じられねえ……」

「信じられなくてもいい。だが現実だ。俺だって幽霊は信じてねえ。けど、見たら信じるしかねえ。それと同じだ。起源ははっきりしてねえが、最近使えるやつが増えてきた。まあ、増えたのか、もともと大勢いて表にでるようになっただけかは知らねえが。どっちにする理由は知らねえし知りたくもねえ。俺の仕事じゃねえし。問題は、それを使って何かやらかそうってやつらが出てきたことだ」

「……昨日みたいにな？」

「ああ、力の目覚めとともに破壊衝動を抑えられなくなった馬鹿が、人に向けて使ったりしてんだよ。だが、通常の警察じゃ手に負えねえ。だから緊急でそれに対抗する組織が必要になった。それが俺たち特命部だよ。餅は餅屋。異能に対して異能で対応する部署だ」

「知らねえよ、そんなの」

「当たり前だ。こんなの公表できるわけねえ。パニックになるし、第一信じて貰えねえ。お前だってまだ信じてないだろ？」

当たり前である。あまりにも非現実的な話を持ってこられてもいいち信用できない。だが、それと同時に、それを実際に目の当たりにして、否定できない、認めている感情も確かにあった。その二つがまさに天秤にかけられ酷く揺れている状態である。

「だから、秘密裏に処理する必要があった。だから、部署自体も地下にあるし、上の連中はほとんど知らねえ。『わけがわからなかったら特命部に任せろ』それくらいしか教えられてない。そのくらい極秘だ。政治家もトップの連中しか知らねえだろうよ。いや、そこんとも俺は詳しくねえ。もしかしたら政治家にもなりやみんな知ってるのかもしれない。とにかく、表に出ちゃいけない、それが俺らだよ。わかったか？」

「まあ、見たものはしょうがねえ。信じるしかねえな。けど、俺にどうしろってんだよ？ 誰にも口にするなってか？ 言われなくて

も誰も信じねえよ」

一人は吐き捨てる。

「まあな、だが、信じて貰えなくても喋っちまうやつはいるんだよ。火のない所に煙は立たないってな。ん？ 違うか？ まあいいや。んで、そんなやつらをどうにかするってのは面倒くせえのさ。だから、最も手っ取り早い方法を使ってんのさ」

手っ取り早い。その言葉を聞いて一人の体が強張る。

「おいおい、だから殺したりしねえって」

「それは信じられねえよ！」

「何だよ？」

「人を殺したやつに言われても信用できねえよ！」

一人は右手で机を強く叩き、氷室を睨みつける。彼の強面に怯みそうになったが、全力で睨む。

氷室は目を細めた。相変わらずの顔ではあるが、どこか切なげにも見える。しばらく黙った後、一息を吐いて氷室は語りだした。
「確かに、俺らは自らの命や一般人の命が危ない場合に犯人を殺してもやむなし、とされてる。だがな、俺は一度たりとも殺したことがねえ」

「白々しい」

「……お前、昨日見たんだよな？」

「見たよ。お前が殺すところ」

「違い。俺が凍らせたやつの能力だ」

「……ああ」

「どんなだった？」

「どんなんて……。やつが顔を掴んだ途端、体に火が着いて――」

「そう、やつの能力は火だ」

「だからなんだよ！？」

「俺の能力は氷だ」

そう言われて一人は少しの間思案する。そして、間もなく答えに行き着く。

「……あ」

「溶けたんだよ、あの後。それも織り込み済みだ。俺は人を殺さねえ」

反応に窮する。恐怖すら感じる顔つきでも、信じがたいような力を持っていても、彼の言葉には力強さがあり、偽りはないように思えた。

そうでなくても、少なくとも昨日は人を殺さなかったというのは真実のようだ。

「……悪かった」

「わかりやいい。話を戻すぞ。手っ取り早い方法ってのは、これだよ」

氷室はポケットからライターのようなものを取り出す。それは昨夜にも見たものだった。見た目は百円ライターと変わりはない。違うといえど中のオイルが見えないことくらいだろうか。だがそれもスケルトンではない普通のライターと一緒にいえばそうだ。

「これは、置換機だ」

「チカン機？」

一人は首を傾げる。”チカン”が”痴漢”としか変換できなかったが、絶対に違うと断言できた。

「……変な想像すんじゃねえぞ。ガキか」

「してねえよ！」

「まあ、いい。能力者に関する記憶を消す装置だ。これを使えば他言されないですむ」

「ちょっと待てよ！ そんなものがあるなら……」

「まあ、そうだな。普通お前みたいな被害者にはこんな話はしねえ。これを使えば一発ですむ話だ。実際、俺もお前にこれを使って、それで終いだと思ってた。昼まではな」

「昼までは？」

「ああ。だが、お前に説明する必要が出てきた。お前に能力が発現した」

「は？」

「今度も”ハツゲン”が”発言”としか変換できなかった。しばらくしてようやく”発現”にたどり着いたが、今度はその意味をつかみ損ねた。」

「いやいやいや！！　ちよっと待ってくれよ！　わけわかんないって！！」

「お前、今日俺がお前を追っかけてたとき、最後に何したか覚えてるか？」

一人は気を失うまでのことを振り返った。自転車を掴まれ、蹴りを防がれ、体当たりを避けられ、こいつが近づいてきて、最後に――
「お前は『消えた』んだ。俺の目の前から。見つけたときにはお前は近くの家の屋根に上っていた。それを異能と呼ばずに何と呼ぶ？」

「……俺には関係ない」

「残念ながら大アリだ。世の中に認知されず、それでいて確かに存在する危険な力だ。こちらとしてもそれを管理する必要がある」

「どうしろってんだよ！！」

「どうもしない。今のところは、な。だが、こちらはお前を能力者として認知する。管理する。必要があれば監視する」

「……消してくれよ」

一人は微かな、枯れるような声で呟いた。氷室は聞こえなかったようで、眉をひそめた。

「消してくれよ！　こんなわけわかんねえ力なんていらねえよ！

消せるんだろ？　そのライターで！　こんなの関わりたくねえよ……」

「消してやりたいが、無理だ。能力者は能力に耐性ができて、この置換機くらいの力は受け付けない」

「嘘だっ！」

一人は勢いよく立ち上がる。氷室は微動だにせず一人を見つめたままである。

「嘘じゃない」

一人は殴りかかりたいと思ったが、それを抑え、力なく座り込んだ。

「……慰めるつもりはねえよ。運が悪かった、それだけだ。くじ引きで外れを引いちまったのさ」

「くじなんて引いてねえよ……！」

「出さなきゃ負けよ、ってやつかな？ ああ、そりゃジャンケンか」
一人はうなだれる。

一人も氷室も何も言わない。しばらくして氷室が大きく息を吐いた。

「今日はもう帰れ。忘れろとは言わねえが、普通に暮らして構わない。それと、これ持ってけ」

氷室は置換機をテーブルの上でスライドさせた。ちょうどよくそれは一人の前で止まった。だが一人はそれを手に取らなかった。

「……いらねえよ」

「そう言うな。さっきみたいに勝手に能力が発現したらどうすんだ？ 吃驚人間ショーにでも出るか？」

氷室は鼻で短く笑った。一人は少し迷ってそれを受け取ると立ち上がった。

第五話 休んだ日に宿題

「また会うかもな」

立ち上がりドアへと向かう一人に向かって氷室が言った。

「会いたかねえよ」

振り向かず一人は即答した。乱暴に扉を開けると龍瀧が立っていた。そこに人がいると予想していなかったので一人は驚いた。一方、彼女は一人の乱暴な振る舞いにもたいして驚きもせず一人を一瞥する。

「送るわ」

相変わらず事務的に話すと翻してエレベーターへと向かう。一人も後をついていった。ふと来たときに見た、開いていた扉を覗き込んだ。こうして見るとあくまで一般的な職場にしか見えない。だが、ここで働いている彼らは皆、この狂った世界に住んでいるのか。

エレベーターに乗り、駐車場に出て青いスポーツカーに乗り込む。それまでも、それからも会話はほとんどなかった。したくもなかった。

外はまだ明るかった。時計を見るとまだ三時だった。密度の濃い時間だったため、五時くらいになっていると思っていた。

一日ですべてが変わってしまった。能力？ 異能？ 馬鹿馬鹿しい。だが、馬鹿馬鹿しくもそれを否定できない。受け入れまいとしたところで、現実は無慈悲なまでに押し寄せる。

無理矢理口に放り込まれ、無理矢理咀嚼させられ、無理矢理飲み込まれる。美味いか不味いかなんて関係ない。食べなくては生きていけない、それだけだ。

果たしてこのまま何事もないように暮らしていけるのだろうか。そんな不安がよぎる。無理だ。不可能だ。何事があったのだから、何事もないように、なんてできるはずがない。

「まだ、信じていない？」

家も近くなつた頃、龍瀧が口を開いた。

「別に。信じたよ。けど、俺には関係ない」

「そうでしょうね。けど、覚えておいてね。紛れもない事実だということを」

「関係ない」

一人は繰り返した。それは龍瀧にというよりも、自分を論しているのだと自分で思った。

「ええ、けど無視しちゃ駄目。日本で一日に九十人が自殺しているとか、世界中で一日に四万人が餓死しているとか、それと似たようなもの。あなたはこれを無視できる？」

「説教？」

一人は龍瀧を睨んだ。龍瀧は運転しているので一人の方を向かなかつたが、口調でわかつたらしく、バツの悪い顔をした。一応感情はあるらしい、というのは失礼だろうか。だが、関係ない。

「あら、ごめんなさい。ただね、知ってほしいのよ。つまりね、何かしろと言ってるんじゃないの。別に世界中で餓死者が出るから募金しなさいとか、食事の時に有難みを感じなさいとか、そんなことじゃないの。もちろんそれは立派なことではあるけどね。自戒……に近いかしら。自分の知らないところでそういうことがあった。信じられな能力があった。それだけ知っていればいいわ。そのあとどう感じるかはあなたの自由。それだけ。……着いたわ」

車は一人の家の前に止まった。彼は急いで車を降りる。扉を乱暴に閉めようとしたが、迷って慎重に閉めた。弁償などという話になつたら途方もない金額だと思つたからだ。

一刻も早く、現実に戻りたかつた。だが、彼女はドアの窓を下げて話しかけてくる。早く帰ってくれ、と一人は少し苛々した。

「学校には話を通しておいたし、自転車は学校に置いてあるわ。あとこれ」

彼女は小さな紙切れを差し出した。

「何、それ」

「氷室の電話番号」

「いらねえよ」

「吃驚人間ショーにでるだけならまだマシよ。もっと最悪なケースを想像しなさい」

最悪なケース……、それは昨日のように能力者に殺されることだろう。

「別にね、刃物で殺されようと、拳銃で殺されようと、能力で殺されようと、たいして差はないのよ。だから特別扱いしない。それ故に世間に公表する必要はないとこちらは考えてる。世界の混乱と天秤に掛けての結論よ。だからあなたも特別扱いしない、というのが道理なのだろうけど、被害を最小限にしたいというのは当たり前前提としてあるから。つまり一一〇番の代わりと考えてもらっているわ」

一人は少し考えて、それを奪うようにして受け取った。乱暴にブレザーのポケットにしまいこむ。

「そうそう、あなた、体育で何やってる？」

「は？」

「いいから」

「……陸上、だけど」

「そう。加減して走った方がいいわよ」

「は？」

「じゃあね」

彼女は窓を閉めるとそのまま車を発進させて去って行った。

「……何なんだよ」

母は買い物にでも出かけているのかいなかった。台所で水を一杯飲んでから二階の自分の部屋へ上がった。

鞆を無造作に投げつけてからベッドに倒れこむ。

「ああもうっ!!」

ベッドに体を乱暴に埋めてみても、何も変わらなかった。

枕を思いっきり投げつけてみてた。何も変わらなかった。変わるはずがなかった。

たとえば、手当たり次第に物を放り投げても、感情の許すままに壊してみても、それは変わらないのだろう。

自分の中に渦巻く感情。恐れか、悲痛か、絶望か。

何がそんなに恐ろしいのか。

何がそんなに悲しいのか。

何がそんなに耐え難いのか。

そう問われても答えられない。答えられないが、確かにそうなのだ。

ゲームのような、漫画のような能力が手に入って嬉しくないのか？
嬉しいはずがない。そんなやつがいたら聞いてみたいものだ。
人が殺されるところを見たことがあるのか？ と。

一人の頭には未だに昨夜の光景がこびりついていた。犯人のおぞましい笑みも、被害者の悲痛な断末魔も、人が焼ける匂いだって思い出せる。

そんな力が嬉しいのか。

拳銃を渡されて人を撃つてみたいと思うのか。たいていの人は目の前にそれがあるだけで恐怖で身を引いてしまうだろう。

それと同じ。自分は拳銃と同じなのだ。人を殺してしまうかもしれない。人に殺されるかもしれない。そんな世界で生きていけというのか――

「……………ん」

着たままの制服のズボンが振動した。部屋は暗かった。どうやら眠っていて、今の振動で目が覚めたようだ。相当に眠りが浅かったらしい。

見てみると電話ではなくメールで、送り主は花梨。件名なしで本文には「あーけーてっ」とあった。

「……………あ？」

ゆつくりと起き上がって部屋の明かりをつけた後、窓際へと向かう。都市の外灯のせいか晴れているが星は見えない。目線を下へとおろすと、外灯からでもよくわかる笑顔で手を振る果山花梨の姿があった。

状況が呑み込めなかったが、とりあえずとりあえず部屋着に着替えて階段を下りていく。そのまま玄関を開けると目の前に花梨が立っていた。

「何だよこんな時間に」

確かに、高校生が出歩いてはいけないほどの時間ではない。そもそも、このご時世、もはやそんな時間はないに等しい。

それでも、普段なら夕食も済まして、さて何をしようかといった頃合いである。そう思うと急に腹が減ってきた。

「ちよつと、ね」

そう言うとは花梨は勝手知ったるといった様子で上がりこむと、居間の両親に挨拶をして二階の一人の部屋へと向かっていった。花梨じゃなかったら大変なことになっていただろう。

一人は両親に「帰ってたの?」と言われた。

「うわあ、久しぶりだね、一人の部屋」

一人の意向を全く無視して花梨はひとり感慨に耽っている。

「勝手に入ってんじゃねえよ」

「お邪魔します」

彼女は一人と向き合って頭を下げた。

「そういう問題じゃねえ。何しに来たんだよ、こんな時間に」
「えっとね」

花梨はベッドに腰掛けると鞆をあさり始める。私服だが、持っている鞆は学生鞆だった。

「あった。はい、今日のプリント」

鞆の中からクリアファイルを取り出し、その中の数枚の紙を一人に手渡す。

「何だよ、こんなの明日でいいじゃん」

「これはついで」

彼女はベッドから立ち上がり、押入れへと向かう。一人に無断でそこを開けると、下の段に入っている小さめの折りたたみテーブルを引っ張り出してきた。

「おい？」

基本的に部屋の模様替えなどすることはないので最後に花梨がやってきた頃と変わらないはずだが、それでも無闇に部屋の中を物色されるのはあまり好ましくない。別に見られてまずいものがあるわけではないのだが。

「数学？、五十八ページ問七、八、五十九ページ練習問題全部、英語？、三十二ページ英文和訳」

「……は？」

「明日までの宿題」

「げ。そんなの……」

「『休んでいた？ そんなの言い訳じゃないか。君たちには携帯電話という文明の利器という物があるんだ。それとも君には宿題を教えてくれる友達すらないのかい？ ははは』」

彼女は少し声を低くして言った。これは一人たちの数学教師が授業を欠席したために宿題をやったこなかった生徒に対する決まり文句である。だが、似ていない。

「似てた？」

彼女としては自信があったのだろうか、そんなことを尋ねてくる。

「うるせえよ。……まあ、教えてくれてありがとよ」

「一緒にやろ！」

かく言う彼女は既に数学一式を机の上に展開している。

「何でそうなる」

一人は頭をかいた。

「教えてくれたっていいじゃない」

「ったく」

一人も鞆から数学一式を取り出して折りたたみテーブルに置いた。

花梨と向かい合わせになるようにして座り、黙々と宿題をやり始める。テーブルは小さかったが、二人の教科書、ノートを置くことはできた。

しばらくの間、二人は全く話さずに宿題を進めていた。花梨も集中しているようで一人に話しかけたりはしない。

「俺、まだ飯食ってねえんだけど」

途中で一人が空腹に耐えかねて花梨に訴えた。

「え、言ってくれば良かったのに。食べてきていいよ」

一人はそう言われて立ち上がった。結局、二人で行う意味はほとんどなかった。

実際、意味はないのだろう。

花梨は知っているはずだ。今日一人が学校を抜け出したことを。

花梨は知っているのかもしれない。一人が何かに気を病んでいることを。

一人は知っていた。花梨が不器用だということ。

一人は知っていた。花梨が自分より頭がいいことを。

一人は知っていた。花梨が一人に教えてもらうようなことはないことを。

だから。

「ありがとう」

こんな言葉が出てきたのかもしれない。

「え？ 私がご飯食べちゃダメとか言うと思ったの？」

少し花梨は不機嫌になった。

「いや、なんでもない」

言うてからあまりにも恥ずかしくて（しかも誤解されて）一人は目を背けた。花梨は訝しげに首を傾げていたが、やがて気にしないことにしたらしい、目線を自分の左腕の時計に向けた。

「あっ！ もうこんな時間！？」

「最初からこんな時間だったぞ」

「もう帰らなきゃ」

「何だ？ 何かあんの？」

「明日のお弁当の準備しなきゃ」

彼女は慌ただしく自分の教科書やノートを鞆に詰め込んでいく。

「え、お前、自分で弁当作ってんの？」

「そうだよ？」

「はあ、何か意外」

「え、何？ それって馬鹿にしてる？」

「いや、普通に意外」

「感心、とかって言って欲しいな」

「ああ、うん」

「何、その気のない返事は？」

花梨はそう言って頬を膨らませる。その仕草がわざとらしくて、何だか可笑しくて、一人は笑った。

第六話 フライング

翌日、朝起きた時点で気分は憂鬱だった。歩いていても憂鬱、教室にいても憂鬱だった。

憂鬱、憂鬱、憂鬱……。

「はあ……」

俺は駄目なやつだ。一人はそう思った。

昨夜花梨の不器用な励ましで気が晴れたと思っていた。

それでも気が少し晴れたとはいえ、あくまで少しである。授業中黙って聞いていれば、自ずと昨日、一昨日のことを振り返ってしまう。まだ信じたくないのだろうかと思問自答する。むしろ、信じてしまったからこそ困惑しているのかもしれない。

一人でいればどんどん靄がかかっていく。五里霧中、暗中模索。

普段は寝てしまう授業も起きていられた。もちろん、内容はこれっぽっちも頭に入っていない。これはいつも通りだが。ずっと頭の中で「能力」と「異能」というフレーズがぐるぐると回っていた。

「なあ、お前、変だぞ？ 昨日何があった？」

四時限目が終わったところで、良介が一人と太一のもとへやってきた。開口一番にそれである。それほど態度に出ているつもりはなかったのだが。

「あ？ 何でもねえよ。それより昼飯買いに行こうぜ」

一人は立ち上がった。だが、良介は動かなかった。

「お前、授業聞いてないときはたいてい寝てるだろ。今日は授業も聞かない、寝てもいない。心ここにあらず、って感じだったぞ」

「ちょっと待て、俺が寝てなきゃおかしいってか？」

「そこまでは言っていない。聞いていないときは寝てるってのも言い過ぎた。悪い。ただ、とにかくおかしいんだよ、昨日から――」

「なあ、今日もお預けでいいわけ？」

良介が退かずに尋ねてきたところを太一が割って入って来た。昼

食のことを言っているのだ。ナイスタイミングだと、一人は内心で拍手を送った。

「む。仕方ない。行くか」

三人はそろって教室を出て行く。出ていく寸前、やたらとわざとらしい咳払いが聞こえた気がして振り返った。だが、誰のものはわからなかった。タイミングがタイミングだったので自分たちに向けられたものだと思ったが、どうやら自分たちには関係ないようだ。こんなことはよくある。

花梨は弁当箱二つを持って遠山柑奈の席まで向かう。柑奈の前の席の生徒は別の席に移動しているので（そうやって昼休みは漏れなく重複なく別の席に移動できるのである）その席を反転させて席に座る。黙って、弁当箱の一つを柑奈へと渡した。

「これで何回目？」

遠山柑奈はそう言って目を細める。呆れたと言っているが、睨んでいるように見える。彼女は三白眼で、悪い目つきがさらに悪くなるから本当に呆れた時しか顔に出さないの、とその時も同じ表情で言っていた。たしかその時が初めて弁当を渡した時だったと思う。

「そんなの数えてないよ」

「十四回目」

ため息をつきながら柑奈は答える。それを聞いて花梨もため息が出そうになる。

「え、嫌だ、数えないでよ」

「まあまあ、気にしなさんな。それにしても呆れたねえ。ま、別に私は昼食代がお小遣いに回るからいいんだけどさ」

彼女は相変わらずの細目で花梨を見ている。弁当箱を開けると感嘆の声を上げる。いただきますと、律儀に手を合わせて言う、真っ先に玉子焼きに手をつける。

「いやいや、この玉子焼きはいつ食べても美味ですなあ」

「そう言ってくれると嬉しいわ」

花梨はにっこりと微笑むが、同時に柑奈に睨まれてしまう。今度は本当に睨んでいるようだ。

「はあ、それを誰かさんに言ってほしくないのかねえ」

「口調がいやらしいよ」

苦笑しながらも自分の弁当箱も開けて、食べ始める。

「ふん。ほんとに呆れるよ。十年も付き合いがあつて、未だに弁当の一つも渡せないとはね」

「だって……」

花梨は顔を恥ずかしくなって俯く。

「てか、今更だけど、まあこんなベタベタな方法、思いついたね。もうべったべた。ゴキブリホイホイかっての。私じゃなかったら大笑いされてるよ」

「うう……」

たとえ柑奈にも大笑いされている事実があらうとも言い返せない。自分の顔は真っ赤になっているのだらうと自覚できた。耳が熱い。

「ま、あの二人が邪魔だつていうのはあるけどね」

「でしょでしょ!？」

「言い訳していいわけ?」

「……寒い」

「じゃあ言わすな」

「言わせてないよ!」

「じゃあ渡してみなさいな」

「うっ……」

根本的問題に帰結し、花梨は言葉に詰まる。

「だいたい、去年はどうだったのさ? え? もしかして一年間同じ過ちを繰り返してきたの?」

「過ちとか言わないでよ。去年はクラスが違ったから……」

「なる。ま、明日は渡せるといいねえ。何かあいつ元気ないみたいだし。あげたら喜ぶんじゃない?」

「そう、かな?」

「さあね。てか、あいつどうしたの？　昨日も途中で帰っちゃうし。何か聞いてないの？」

「うん。聞いてない」

「あ、そ。何でもいいから元気付けてあげたら？　あいつらがギクシャクしてるとクラスがおかしくなるから」

こればかりは弁当ぐらいじゃどうにもならないかもしれない、と花梨は思った。

「そういえば」

運よくまともな昼食を買うことができた三人がいつものように一人と太一（とその隣）の席に座ると何かを思い出した太一が口を開いた。良介は顔を顰めたが、太一は気づいていない。良介としては先ほどの話の続きをしたかっただろうが、太一はもう忘れているように、全く気にすることなく話し始めた。

「この間、その川沿いで殺人事件があったらしいぜ」

先ほどまでは天使に見えた太一が今度は悪魔に見えた。もともと聞きたくなかった、そして聞くことはないだろうと思っていた話題に一人は体を強張らせる。

「そこで？」

さすがに話を無視できなかった良介が尋ねる。

「ああ、しかも焼死体だってさ」

「何？　殺人ってことは火事じゃないんだろ？　体に火でもつけられたのか？」

「てか何でそんなこと知ってんだよ？」

平静を装いつつ恐るおそる一人が尋ねる。秘密なのではなかったのか。

「そりゃ、殺人事件なんてすぐ話題になるだろ。むしろ何で知らないの？　ってくらい。ニュースでやってたろ。新聞にも載ってるよ」

「お前がニュースなんて見てんのか」

「悪いかよ？」

「いや、別に。ただ、良介も知らないのか」

「俺はニュース見ないで勉強してるからな」

「ガリ勉」

「うるさいな。俺は勉強してる、太一はニュースを見てる。じゃあお前は？」

「……寝てるよ」

「……ああそう。で、どうなの、太一？」

「何が？」

「だから、火事じゃなくて、殺人だっていう話」

「ああ、何でも体に灯油をかけられて火をつけられたらしいぜ」

「違う。あいつは灯油なんて使わなかった。何も使わずに火をつけたのだ。ということは、なるほど、嘘の情報か。事件を隠すのは無理、ならば嘘の情報を流して現実に近づければいいということだ。」

「なんでも、まだ犯人捕まってないらしいぜ」

「本当か？ 恐ろしいな」

「……捕まってない？ そんな馬鹿な。犯人は氷室が捕まえたはずだ。いや、事件が起きたのは一昨日の夜だ。すぐに捕まえられたと報道する方がおかしいか。だが、悪戯に市民に不安を抱かせるのはどうだろうか。」

「……一人」

良介が眼鏡を上げながら言った。そんなにずれるなら新しいのを買えばいいのに、と思う。

「んあ？」

「どうした、黙り込んで」

「しつこい。そして目敏い。いや、太一が鈍感なだけか。」

「別に、物騒だなと思ってよ」

「本当にそれだけか？」

「しつこいな。何だってさ？」

「……わかった。それより、次、体育だぞ。そろそろ行こう」

明らかに納得していないが、良介はそう言って立ち上がった。

太一はともかく、良介はどうしたものか。なかなか退いてくれそうにない。

体育館の更衣室では意図的に二人から離れた。更衣室はロッカーとは名ばかりの棚が三列ほど並んでいる。明らかにキャパシティをオーバーしていて身動きを取るのすら難しい作業だった。そのため、二人も無理に追ってくることはなかった。

乱暴にブレザーを棚に放り込む。両隣の生徒が顔を顰めた。

「あ、悪い」

どうにも苛々してしまっている。不安・不満のはけ口がないのだ。誰にも言えない、言っても信じてもらえない。そんな事情を抱え込んでしまった。

悪戯を白状できずにもやもやと日々を過ごすときの感覚に似ているが、今回やましいことは全くしていない。むしろ被害者だとも言えるのに。

たとい信じてもらえなくても、やはり言えない。心配をかけられない。一般人は知らなくていい世界なのだ。

……自分も一般人のはずなのに。

ため息すら出ない。いっそ叫び散らしてすっきりしてしまいたい。おそらくそんなことですっきりはしないだろうけれど。

思いつきり暴れたい。ある意味体育は絶好の機会である。陸上と言うのが不満といえど不満だが。体を動かせば少しは気が晴れるかもしれない。

そう思いながらジャージに着替えた。ジャージを入れていた袋も棚に入れようとしたが、棚が小さく、制服も乱暴に入れていたため、入りきらなかった。

舌打ちして、もう少し丁寧に入れようと棚の中身を全て一度出した。何かが床に落ちた。

(やべっ……)

ブレザーのポケットから落ちた置換機だった。周りには気づかれ

ていない。他の他人からすればライター以外の何物にも見えない。こういったことを教師に密告する真面目な生徒も少なくない。

咄嗟に足でそれを踏んで隠し、何事もなかったかのように制服を整理して入れた。周りをよく見ながら、靴ひもを結ぶふりをしてそれをジャージのポケットに入れた。

「おーし、今日は百メートルのタイム計るぞ。じゃあ、準備運動から！」

体育教師の指示で、クラスメイトはのろのろと動き出す。生徒たちのレスポンスが鈍いのはおそらくまだ肌寒い季節の外での体育、陸上という地味な競技などといった要因があるのだろう。

グラウンドは先日雪が解けて使えるようになったばかりだった。雪こそないが水はけの悪い端っこは雨が降ったわけでもないのに水たまりがあった。

四百メートルトラックの中のフィールド競技用の芝生はまだ元気がなく、湿っていた。その中で生徒たちが準備体操を始める。湿っているので座ってのストレッチはしたくなかった。

準備体操を終えて、教師のどうでもいい説明を聞く。いや、聞き流す。百メートルトラックに移動して出席番号順に四列に並んだ。体育は二クラス合同で、一クラス二列。一人の出席番号は七番なので四番目のグループだった。

とにかく、思いつき走りうと一人は思った。その程度で気が晴れるとは思えないけれど、少しはマシだろう。それにどうにも体が軽い。別にタイムに興味はないけれど、自己ベストを出せるかもしれない。

ピストルのけたたましい音にいちいち顔を顰めながら自分の番が来るのを待ち、やがて自分の番になった。

「位置について」

出席番号が後ろ方の生徒がピストルを持ち、号令をかける。一人は地面に手を着きクラウチングスタートの体勢をとる。

「よい」

ピストルの音とともに命一杯地面を蹴る。

最初の印象は、軽い。気分はこんなにも重いと言うのに、やたらと体が動く。もしかしたら陸上部でも愚図なやつには勝てるくらいかもしれないと思った。

背中に羽が生えたよう、などという胡散臭い比喻は信じていなかったが、まんざら嘘でもないな、などと思いながら地面を蹴っていた。気分がよかった。

「……え？」

しかし、それも一瞬のこと。すぐにおかしいと気がついた。

ゴールラインを越えて立ち止まると、そこでタイムを計測していた先生が口をあんどりと開けて呆けている。

振り返れば同じくスタートしたはずの三人が五十メートルほどの位置であっけに取られて立ち尽くしていた。

「お、お前……！」

先生の声が震えている。一人は状況が読み込めずに、咄嗟にポケットから置換機を取り出して教師に向けていた。

第七話 信号機

「よう。また会ったな」

「また会ったな、じゃねえよこの野郎！ 何なんだよあれは!？」

ここは警察の地下にある特命部のオフィス。その中の執行課の奥のデスクに座っている氷室とその氷室に対し怒鳴り散らしている一人。周りの人間は、ある者はチラチラとそちらを覗きながら作業をしているし、またある者は気にも留めずに自分の作業に浸っている。放課後、一人は真っ直ぐに特命部へと向かった。もちろん、体育の授業のときの真相を知るためである。

あの時、確実に一人は世界記録など優に超えていた。有り得ない話である。だが、現実である。理由は一つしか思い浮かばない。能力のせいだ。

あの後、一人は逃げ惑う生徒全員に置換機を使ってその場を凌いだ。自分の体の異変に気付いた一人にとっては、逃げ惑う生徒四十人を相手にするのも容易かった。

驚いたことに、置換機を受けたクラスメイトたちは、一時気絶していたが、授業の終わり間近に目を覚ますと何事もなく動き出した。それはあまりにも滑稽な光景で、しばらくその場を動くことができなかった。

その後も太一や良介は何事もなく接してくるので、不気味すぎてその時のことを尋ねることはできなかった。

「あれ、って言われてもなあ」

氷室は面倒くさそうに一人を見つめると、ふと思い出したかのようにおもむろに胸ポケットから煙草を取り出し火をつけた。

「何なんだよ!？ 体が、体が……」

「ああ、体がすげえ軽く動くってか？」

氷室は煙草の煙を吐き出しながら言った。

「軽くなってもんじゃないやねえよ！ 何なんだよ一体!？ これも能力

ってやつなのかよ？」

「近からず遠からずだな。能力ってわけじゃないが、能力に目覚めたやつは体が活性化されて身体能力が異常に向上すんだよ」

「何で黙ってたんだよ！ てめえのせいで災難だったぞ！」

「ああ、悪い。忘れてた」

そう言って灰皿に煙草を押し付ける。

これには一人も頭にきた。

一人は氷室のデスクを勢いよく叩くとそのまま氷室の胸ぐらを掴んだ。さすがに周りの注目を浴びてしまい、部屋中が静まり返り、誰もが二人を見た。しかし、対象が氷室であることがわかると半分ほどは作業に戻っていった。あたりから「また課長か」といった囁きが零れてくる。

「悪い。そりゃ怒るわな。納得しねえよな。わかったよ、納得する理由を教えてやるよ」

そう言うと氷室は一人の腕を引き離し、別に身なりを整えることもせずそのまま座り灰皿にかけていた煙草を再び口にする。

「別に忘れてたわけじゃねえんだ。忘れてたって言えば渋々ながら半分開らいは納得するから、いつもまずそう言うんだ」

絶対、嘘だろう。

「いいか、俺があえて言わなかったのは認識してもらうためだよ」

「あ？」

「自分が人^{バケモノ}じゃなくなっちゃったってことをだよ。どうだ、気分は？」

一人は今度は氷室のデスクを蹴り飛ばした。振動で書類が飛び散り、コーヒーの入ったマグカップが落ちて割れ鈍い音を立てた。残っていたコーヒーが床に新たな模様を描いていく。

再び左手で氷室の胸ぐらを掴むと、彼を無理矢理立たせ、右の拳を顔面目掛けて――

「おいおい、そうカッカすんなよ」

勢いよく振るわれた右腕は呆気なく氷室の左手の手のひらに収ま

り、バチンと小気味良い音を立てた。

「っ!!」

氷室はその左手で一人の右手首を掴んだ。そして右腕で胸ぐらを掴んでいた左手を剥がす。

「ちようどいい。好きなだけ殴らせてやるよ。おい、有澤」

「あ、はい」

氷室は近くにいた二十代半ばの青年を呼びつける。

「ちよつと付き合え」

「わかりました」

そう返事をして彼は立ち上がる。長身細身で氷室とは大違いの精悍な顔つきである。

「それと、倉本」

「あ、僕もですか？」

呼ばれたひ弱そうな青年が立ち上がりかける。彼も有澤と呼ばれた男と同年代だろう。

「いや。ここ、片付けといって」

「え？　ちよ、ちよつと、課長！」

倉本の泣きそうな声を無視して氷室は一人を引っ張り有澤とともにオフィスを後にする。

一人が連れてこられてた場所は特命部のさらに下の階だった。扉は左右に一つずつと奥に一つ。有澤は右の扉を入っていき、残る二人は奥の扉へと入った。

そこは広い空間だった。小さな体育館ほどの広さだが、真っ白で何もない。ただ、広い空間だった。地下にこれほどの施設があるのには驚きである。

「ここは……？」

「まあ、平たく言えば格技場だよ」

「格技場？」

「ああ、そうだ。さて……」

氷室は一人から距離を取り正対する。二人は格技場の真ん中に立ち、ちょうどこれから試合でも始めるのかというような位置になった。

「これからお前に好きなだけ殴らせてやる。ただし、俺は殴られる気はない。避ける、反撃する。自ら攻撃も仕掛ける。それだけだ」

一人は彼の言っている意味も意図もわからなかった。確かに彼を殴りつけたいほど腹は立っているが、改まって殴り合いを始める気はさらさらない。

「どうした？ こないのか？」

「……知らねえからな」

一人は駆け出し、右腕を振るう。だがそれは先ほどと同じように左手で阻まれた。先ほどと違ったのはその後だ。氷室は掴んだ腕をそのまま下へと振り下ろす。一人はバランスを崩し前のめりになった。

「かっ……！」

そこに氷室の右膝が腹に入った。一人の呼吸が一瞬止まり、そのまま重力にしたがって床に倒れこんだ。

「あら、意外と呆気ないのな」

「うっ、うるせえ!!」

咳き込む一人は起き上がり際に拳を下から突き上げるようにして腹を狙った。それを氷室は体をひねって避ける。そして左足を軸に回転し、右足で一人を背中から蹴り飛ばした。

数メートル吹き飛ばされて、その場に蹲る。両膝をつきながらも体を起こすが、立ち上がるには至らない。

立ち上がれない。

「……ふざけんなよ」

一人は思った。

否、本能で感じた。

強い。勝てるはずがない。

一発入れることさえ無理だろうと。

だが、諦めるわけにはいかない。彼に恨みはない。彼は悪くない。自分も悪くない。誰も悪くない。本当に、運が悪かっただけ。日常から外れてしまったのは、全くの偶然。

それでも、戻りたい。忘れない。納得できない。人が炎を出すことなんて、人が物を凍らせることなんて、恐ろしくて考えたくもない。

そのやり場のない苛立ちをぶつける相手は今彼しかない、それだけだ。

「うわあああああああ!!!!!!」

一人は起き上がり、真っ直ぐ氷室に突っ込む。そして頭目掛けて右足を振り上げる。

「単純だなあ、お前」

それは簡単に氷室の左腕に阻まれる。

だが、それでは終わらない。一人はそのまま右足首を彼の左腕にフックのように掛けて、左足を蹴って飛び上がる。つまり、彼の左足に、乗った。

「なっ!?!」

そこからすぐに飛び降り、彼の背後に回る。素早く身を翻すと、同じく振り返った氷室と目が合った。何も考えずに彼の脳天目指して足を振り上げた。

「うらああああ!!!!!!」

今度こそ右側頭部に命中すると、そのまま氷室を壁際まで吹き飛ばした。

彼は倒れこむが、すぐに起き上がって壁に寄りかかるように座り込むと、薄い笑顔で一人を見つめた。

「なかなかやるねえ。格闘技とかやってたわけじゃないんだろ?」

「んなもん、やったことねえよ」

そう答える一人の息は上がっている。今まで使ったことのないような力を使ったのだから無理もないかもしれない。それでなくても喧嘩なんて何年もしたことがなかった。

「だろうな。型が無茶苦茶だ。だが、筋はいいな。そういや、前もお前に吹っ飛ばされたっけか。あの時はお前も目覚める前だったから痛みはたいしたことなかったんだけどよ。見事に入ったからね」
そう言って氷室は以前蹴られた顎をさすり、埃を落とすようにうすーツを叩きながら立ち上がる。そして、口から血混じりの唾を地面に吐き出す。

「だが、まだまだだ」

言い切らぬうちに、一人の視界から氷室が消える。消えたと思った瞬間には背中に強い衝撃を受けていた。

「がっ!!」

今度は一人が壁に吹き飛ばされる番だった。体を強く打ちつけてその場に蹲る。

「この野郎!」

立ち上がり、氷室へと向かう。寸前でステップして、方向を変えて氷室の右後ろへと回ろうとする。

「フェイントのつもりか?」

氷室の左足が伸びてきて一人の腹に命中する。蹲ったところを蹴り上げられて宙に浮き、右の拳が飛び込んでくる。一人の体はピンポン玉のように軽く飛んでいった。

壁まで飛ばされた一人は動かない。動く気力がない。動く体力がない。動く理由がない。

「何やってんだろ、俺」

一人は呟いたが、少し距離のある氷室には聞こえない。聞かせたくない。

このままでは死んでしまう。なぜ? どうして? 自分はただ、変な能力に目覚めただけなのに、それだけで殺されてしまうのだろうか。目覚めたことが罪なのか?

『課長! やりすぎじゃないですか?』

有澤の声が聞こえる。どこかにカメラとスピーカーがあるらしい。
「わかってるよ。もう終いだ」

どこかにあるマイクに向かって氷室が言う。そして、一人のほうに着々と歩み寄る。

「もう終わりだ。俺も暇じゃねえしな」

周囲の空気が冷える。これは……。

「ちよつと、待てよ……」

かろうじて出したその声は、彼に聞こえているとは思えない。

昨日は殺す気はないと言ったじゃないか。彼は自分を氷漬けにする気だ。

彼の歩みは止まらない。

止めてくれ。

歩みは止まらない。

助けてくれ。

止まらない。

どうして俺が。

氷室の手が顔寸前まで近づいた。座っているので見上げる形になる。

「うわあああああああ……！！！！！！！！！！」

次の瞬間、一人の目の前から氷室が消えた。

いや、氷室が消えたのではない。自分が消えたのだ。

一人がそう気づくまでにそうとう時間がかかった。

氷室が消え、視界は天井だけになった。何が起きたのかわからずしばらく呆けていたが、目線を降ろすと、向こう側の壁に氷室がいた。彼は驚きの表情を隠さずにこちらを見ている。

「有澤！撮れたか？」

「はい、バッチリです」

氷室は満足そうに頷くと一人の下へと歩み寄る。

「悪かったな。痛かったろ？」

「うるせえよ。さんざん痛めつけといて……」

「すまん。だが、確かめたかったんだよ」

「何を」

「お前の能力と、おまえ自身の力だよ」

「は？」

どう考えても重複するその意味に対して、一人は何も言えなかった。状況がまったく理解できなかった。

「立てるか？」

一人の頭に浮かぶクエスチョンを氷室は気にもせず、手を差し伸べる。それを一人は弾くと自力で立ち上がった。

氷室は呆れたようにため息をついたが、その表情は笑っているように見えた。

「ついて来い」

氷室は扉へと向かう。

「嫌だね」

一人がそう言うのと氷室は立ち止まり振り返った。驚きの表情が見取れる。

「こんなに痛めつけられて、何でそこまでして従わなきゃいけないんだよ！ 警察はそんなに偉いのかよ！？」

「……お前の為だよ」

しばらく間をおいて、一度ため息をつく氷室は言った。

「お前はこれから今まで見えなかったものが見えてくるはずだ。お前は知らなくちゃいけない。お前だけじゃない。警察だろうとなかろうと、異能を持てば知らなくちゃいけない」

「意味わかんねえよ！ 何を知らなきゃいけないってんだよっ！！」

「それはじきにわかる。というよりも人に言われてわかるものじゃねえ」

「そんなの納得できるわけねえよ!!」

「痛めつけたのは悪かった。お前の順応力があまりにも悪かったんだな。それと、個人的に実力を見たかった。とにかくもうちょっと付き合ってくれや」

「……………ちっ」

一人は黙って氷室の後について行った。

二人は最初に有澤が入った部屋へと向かった。中は機械室のようで、モニターがいくつもついており、よくわからない機械で埋め尽くされていた。

「どうだ、有澤」

「……何と言うか、珍しい、と思います。見てください」

有澤は淀みなくキーボードを叩く。すると、一つの画面に先ほどの一人と氷室の戦闘シーンが再生された。ちょうど、最後の場面で氷室が異能を使うところだった。ふと一人が画面から消えた。

「消えてますよね」

「ああ、消えてるな。少なくとも、見えない」

「スローで再生します」

再びキーボードを叩く有澤。すると今度はスローで映像が再生されていく。

「……遅すぎねえ?」

一人は苛々したように言った。それほど、映像のスピードが遅いのだ。

「百六十キロのボールも止まって見えますよ」

ようやく、氷室の手が一人にかざされたところだった。次の瞬間、一人は画面から姿を消した。

「……消えてるな」

「消えてます。残像すらありません」

「なあ、さっきから何やってんだよ?」

「お前の能力の確認だよ。お前が、超高速で動いてんのか、それと

も本当に消えているのか、それを確かめたかったんだよ」

「……ってことは」

「このカメラでも映らないってことは、消えてるんだよ。所謂レポート、瞬間移動。おそらくかなり貴重な能力だろうな」

「……それがわかってどうなるんだよ？」

「ん？ 別にどうにもならん」

「はあ！？」

「単純に確かめたかった。そんだけだからな」

「ふざけんな！ そんなことのために俺は殴られたってのかよ！？」

「そんなことって言うな。おまえ自身自分の力を知っておくのは大事だろ」

「殴る必要ないだろ！！」

「じゃあ、今ここで使ってみろよ」

「なっ！？」

「できないだろ？ 使い方を知らねえんだ。だから追い込んで無意識に使わせたんだよ」

「マジ納得できねえ……。帰る！」

一人は出口まで歩き、扉を乱暴に閉めて出て行った。

「あ、おい！ ……行っちゃった」

「言いそびれましたね」

有澤は椅子を回転させて氷室と向き合った。

「何のことだ？」

氷室の口元がわずかに上がった。

「とぼけないでくださいよ。彼を非常勤に誘うつもりだったんですよ？」

「いずれは、な」

「彼、たぶん入りませんよ」

「だろうな」

「非常勤なんて、馬鹿か、それこそお人よししかやらないじゃない

ですか。彼、どっちでもないでしょう？」

「だろうな」

「ええ。特に彼はまだこの異能の存在する世界を受け入れてません。受け入れたとしても、自分から危ない橋を渡る必要はないでしょう。そんなに彼が気に入ったんですか？」

「まあな。あいつに入れられた顎は結構効いた」

「ところで、どこで出会ったんですか？」

「ああ、そりゃな——」

「いい加減にしたら？」

静かな、事務的な口調が室内に響き渡る。入り口にはいつの間にか龍瀧が立っていた。有澤は事態が飲み込めていないようで、氷室と龍瀧を交互に見渡していた。

彼女は持っていた書類をそこにあったデスクに無造作に投げると、睨みを利かせて氷室を見た。感情を表に出している彼女は黄色信号だ。

「私を誤魔化せると思って？ 黙っておいてあげたけど、そろそろ限界よ」

「佐倉には追わせてある」

「佐倉さん、ね。勝手に非常勤を使ったりして。いいの？ 彼女、オーバーワーク気味よ」

「本人が働きたがってるんだ。仕方ないだろ」

「あなた、本気で言ってるの？」

彼女は強い口調で言った。限りなく赤信号に近い。

「んなわけねえだろ、阿呆」

「ならいいけど。とにかく、部長にバレても知らないわよ。全く、一度は動きを封じたんでしょ？」

「ちよっと、な。顎が利いた」

「は？」

「いや、なんでもない」

「とにかくマズイわよ」

彼女は一度デスクに置いた書類を手取る。そこにはある男の経歴が記されていた。かなり際どい、犯罪間際のものが多数と、実際に犯した犯罪もいくつか。さすがに殺人は一度もなかったが、今回晴れてそれが加わる。

「犯人に逃げられた、なんてね」

第八話 ケータイ着水

「くそっ……マジ最悪」

一人は腫れた頬を押さえながらそう悪態づいた。

全くもって理不尽な一日だった、そう思う。自身の体の異常に始まり、無意味な氷室との戦闘に終わる。これほど損しかない一日というのも珍しいだろう。

一人は空を見上げる。そろそろ日が落ちようかという時刻だが、空はまだ明るい。ただ、太陽はビルに遮られて見えなかった。このビル街の向こうには鮮やかなオレンジ色の眩い夕日があるのだろう。夕日はやがて沈んでいく。一人の気持ちは既に沈んでいた。

一人の気持ちははなんら響かない無機質なビル街を駅に向かって歩く。灯り始めた街灯、店の看板。駅前の電光掲示板には先日の銀行強盗について触れていた。何も響かない。

人々の大多数は駅に向かって歩いている。残業のなかった幸運な人々が温かい家庭を目指し、仕事場から逃げていく。安息を求め、休息を求め、安らぎを求め、安住を求める。そんな人々に追い抜かされるように一人はゆっくりと歩いていた。

電車に乗れば、彼らと一緒に箱詰めになれる。電車は日の沈む方角へと向かっていた。

日は沈み、また上り。循環しているのだ。世の中の理すべてに共通している。景気が上がれば下がり、人の調子も上がればいつか下がる。

自分の気持ちもいずれは上がるのだろうか。一人はそんなことを考える。時間さえ経てば、上がるのだろうか。時間が解決してくれるのだろうか。そうなければいいのに。

稲川駅。実は市内二番目の規模を持つ駅で、その為か近隣もそれなりに充実している。そのため稲川近辺で事を済ます事ができてし

まうのだが、やはり街中ほどではない。そのため逆に田舎だと言われることも多い。自分の住んでいる地区を柵に上げて、である。

そんな稲川駅に到着し、駅を出る。三百メートルほど歩いてから、今日は前日学校に置きっぱなしだった自転車で駅まで来ていたことを思い出して立ち止まる。厳密には、正確には氷室たちが戻ったのだった。

どうしようかと考えて、残りの三キロメートルのことを考えて踵を返した。だが、すぐに立ち止まる。立ち尽くしたというほうが正確かもしれない。

ともかく、一人は視界に入った人物に愕然としたのだ。

黒いジャケットにダメージ加工のジーパン。その格好に見覚えはなかったが、だらしなく伸びた髪といやらしい顔には見覚えがあった。

「な、んで……」

思わず口から言葉が漏れる。

それは先日河川敷にいた男だった。人間を黒焦げにした、あの男である。氷室が捕まえたのではなかったか。

やつが氷を溶かしたところを捕まえたのではなかったか。

そう考えて、彼が「捕まえた」と一言も言わなかったのを思い出した。

……逃げられたのか。

氷室を散々貶してやりたいが、今はそれどころではない。一刻も早くこの場を何とかしなければ。

どうする？ どうすれば生き延びれる？ ……いや、ちよつと待て。

もしかすると、相手は気づいていないのではないか。確かに殺人犯を野放しにするのは危険だが、相手も公衆の面前では何もしないだろう。気づかれる前に逃げ出せば――

「え？」

全身の血液が凝固したかのような寒気がした。男が笑ったのだ。

口元をニヤリと吊り上げ、獲物を見つけたケダモノのような目つきである。その目は、明らかに一人を貫いていた。

「くっ……」

落ち着け。このまま人通りの多い道を通っていけば、時間は稼げる。人がいない場所を避けさえすれば襲われずに済むだろう。だが、それから？ どうやって逃げ出せばいい？

混乱し、停滞しそうな思考回路を鞭打って働かせる。それでも、解決策は浮かばなかった。

とにかく、やつに捕まらないようにと、一定の距離を保って一人は歩くことにした。

平静を装って、ブレザーのポケットに手を突っ込むと、紙屑の感触があった。いつそんなものを入れたのか考えて、それを思い出すとほっと息を吐いた。特注品の一〇〇番だ。

「あれ？ 一人じゃん」

——だが、最悪だ。思わず頭を抱えなくなった。

「あ、ああ。太一か。良介も」

そこにいたのは太一と良介だった。駅前で遊んでいたのだろうか。それとも街まで行った帰りだろうか。どちらにしても状況は悪くなつた。

「……お前、やっぱり変だぞ？」

少しずれた眼鏡を直しながら良介が尋ねる。一人はなんでもないと、上の空に返事をして首だけ後ろに回した。

男は不気味な冷たい笑みを張り付けている。獲物が増えた、と。そう言っているかのようにだった。間違いなく自分が逃げたとしても、二人を追うだろう。そして二人には成す術がない。かといっていつまでも三人でいるわけにもいかない。二人に悟られずに事を進める自信もない。

男がふと近くの電柱に手を添えた。まさか、と一人は身構える。だが、男はそのまま電柱から手を離し、そのまま歩き続ける。

「おい！ 聞いてんのか？」

太一が苛々した様子で一人の肩を叩いたので一人は前を向きなおした。

「悪い。何だって？」

「だから、何してたんだって聞いてんの！ 放課後すぐいな」

その先は聞き取れなかった。地震でも起きたのかと思うほどの地響きが太一の声を掻き消したのである。

「な、何だ！？」

周囲が喧騒で満たされる。周囲の人は皆ある一点に視線を注ぎ、車も急ブレーキで止まっていく。幸い、玉突きにはならなかったが、怒号と悲鳴が渦巻いている。

辺りの電灯や店の看板がすべて消え、信号も意味をなさなくなった。夕暮れ時の町は沈みゆく太陽だけが頼りになって、急に薄暗くなった。

車はどうしていいかわからずにただクラクションを鳴らす。混乱が広がっていくのが通行人のざわめきでわかった。

先ほど男が触れていた電柱が、突然倒れた。もちろん、男が触れていた部分からである。

やはり、彼は電柱を炎で溶かしたのだ。自分だとばれないように、ある程度加減したのだろう。それが時間差で耐え切れなくなつて、倒れた。そう、誰も彼の仕業だとは気づいていない。誰も彼が電柱に触れるところすら見ていなかったのだ。

牽制だ。

どうやら、考えている時間はないらしい。

「ちょっと」

「お、おい」

「何すんだよ！？」

一人は二人を人通りの少ない路地まで引っ張った。そして、二人を抱えて、

跳んだ。

「……………え？」

どちらかが声を漏らした。

一人は近くの民家の屋根に着地した。おそらく誰にも見られなかっただろう。あの男以外には。

思ったとおりだった。大人一人を十数メートルも蹴り飛ばせ、百メートルを悠々と世界記録更新できる体になっているのだから、民家の屋根の上までジャンプするのも不可能ではなかった。ただし、二人を抱えているため、相当な体力を使うようだが。

「ちょ、どうなってんの!？」

「……一人。説明しろよ」

「今、それどころじゃない」

混乱する二人を無視して、一人は屋根から屋根へと飛び移っている。火事場の馬鹿力とはよく言ったものだ。つらくとも、できなくはない。

「おい、誰か追ってきてるぞ!？」

太一がそういうと一人は舌打ちした。当然ではあるが、あの男が追ってこないはずがない。確認する間も惜しんで一人は駆ける。だが、さすがに後ろが気になった。

「どんな感じで追ってきてる？」

「軽々と。って言ったら伝わるかな? 遊んでるように見えるよ」

今度は良介が答える。再び舌打ち。人気のない場所まで追い詰める気だろうか。

「誰だよ、アレ？」

「殺人犯だよ。河川敷の」

「え!?! こないだの? 何で、追われてんの?」

「顔を見たからだろ」

「なるほど、それでか」

良介は一人で納得している。太一は納得がいかないのか、混乱しているのか、腕の中で暴れだす。落としそうになるのを懸命に堪えて、一層力強く抱えなおした。

「ちょ、一一〇番!」

「何て言うんだ? 殺人犯が屋根を飛びながら追ってきています、つてか?」

「じゃあ、どうすんだよ!」?

「専門の知り合いがいる。警察だけどそちに言えば通じる」

「じゃあ、早くしろよ!」

「両手が塞がってる」

「ふざけんなっ!」

「真面目だ馬鹿野郎」

「俺がかかる」

熱くなる二人をよそ目に、良介が冷静に言った。

「お前の側のブレザーのポケットに番号が書いた紙が入ってる」

「取れないぞ」

一人は二人を片方の脇に抱えている。ブレザーのポケットはちょうど良介の体で塞がれていた。

「何とかしろっ」

「無茶言うな!」

そう言いながらも、良介はなんとかしようと体をねじらせたりしている。

「ちよっ、落ちる!」

一人からしてみれば、動く良介を抱えたままでは至難の業だ。暴れているのとはほぼ同じなのだから。滑って落としてしまっただけは一巻の終わりだ。

「死んでも落とすな」

「くそっ、無理! 一回動くな。あれ渡ってからだ」

一人たちの先には大きな川、稲川があった。橋は左右にあるが、

五百メートル以上は離れている。一人は民家の屋根を飛び降り、道路を横断すると、一直線に川へと走った。橋まで走る気はなかった。

「おい！？ 一人！？」

太一が形相を変えて叫ぶ。

「ちょ、ふざけんな！」

一人は太一の抗議など無視する。良介はといえば、もはや半ば諦めているようだ。

河川敷へと飛び降り、助走をつける。川幅は三十メートルほどだろうか。それを、

「うわあああああああ！！！！！！」

跳んだ。

「いやいやいやいや！！ 無理無理無理無理！！ 届かねえって！！！！！！」

太一の叫びの通り、放物線を描いている三人の着地点はどう考えても水中である。どう見積もっても五メートルほど足りない。

「つくそ！」

一人は諦めて二人を、

投げた。

「うわあああああ！！？」

「うおおおおお！！？」

叫び声を上げた二人は河川敷の芝生に軟着陸し、一人は水しぶきを上げて、川に飛び込んだ。しばらくの静寂。

「ぶはっ!!」

「一人!!」

一人が川から頭を出し、岸に上がろうとする。

「大丈夫か？」

良介が尋ね、二人は手を出す。一人はその手を片方ずつ掴んで陸へと上がった。

「うう……。冷てえ」

「当たり前だ。なんつう無茶しやがる」

「あいつは？」

「ほら、あっちに」

良介が向こう岸を指差す。男は反対側からこちらを眺めている。今にも跳んでくるのだろうか。だが、様子を見ているようで、向かってくる気配はない。

「今のうちだ」

一人はズボンのポケットから携帯電話を取り出した。これほど防水機能付きのものを買っておいで良かったと思う日はもう来ないだろう。そして、ブレザーから紙を取り出した。

一人の手が止まった。

もともと皺くちやにしてしまっていた上に、濡れてしまったので、文字がかすれている。

「くそっ!!」

見える文字だけを無理やり解読して、通話ボタンを押す。流れてきたのは、「この番号は……」という機会音声。外れだった。

ちらりと向こう岸を見た。男はもういなかった。慌てて左右を見渡す。だが、見つけられない。諦めたということはないだろう。

「早くしろよ!」

太一が狂ったようにまくし立てる。

「わかってる！ 良介、あいつがどこ行ったか見てないか？」

八に見えた番号を六にしてかけ直す。繋がった。だが、コール音が続く。気付いていないのか、知らない番号だから敬遠しているのか。

「え？ 見てないぞ。……いないな。諦めたんじゃないか？」

「そんなはずない。たぶん、橋まで行ったんだ」

コール音が続く。それでもし、繋がっても、別の誰かが出れば、また違う番号をかけ直さなくてはいけない。

『はい、氷室です』

出た。彼の声を聞いた瞬間に、怒りにも似た感情が湧き上がってきた。

「この野郎！！ 何やってんだよ！ 死にそうだ！！」

『……誰だ？』

「高木！ お前が取り逃がした犯人に殺されそうだ」

『今、どこだ？』

「稲川森林公園！」

『三十分、いや、二十分で行く』

「十分で来い！」

電話が切れた。一人は携帯電話をポケットにしまいこんだ。

「森林公園？」

「人目につかないほうがいいだろ」

河川敷を上がれば、すぐそこには森林公園がある。下手にあちこちに逃げるよりは、氷室が来るのを待った方が良い。

「なあ、あれじゃないか？」

良介が道の向こうを指差すと、かすかに人が見えた。走っているように見えるし、そのスピードもとてつもないように見える。間違いない、先ほどの男だ。

「行くぞ」

一人は頭を振って髪から水を飛ばしながら歩き出した。

「なあ、ちょっと待てよ」

太一が一人を制する。一人は頭だけ振り返るが歩みは止めない。

「お前も、あの男も普通じゃないのはわかったよ。けど、俺らって関係なくね？」

「ああ、関係ない」

「いや、ちょ、じゃあ、何でこんな目にあわなきゃいけないんだよ！？」

「お前らを逃がすためだよ」

「はあ！？」

「やつは俺を狙ってる。けど、俺じゃなくてもいいんだ」

「……意味わかんねえ」

「やつにお前らと話をしているとところを見られた。そこで逃げたらお前らが標的になるかもしれないからな」

「なるほど」

良介が落ちて着いた様子で首を縦に振る。太一はと言うと、混乱しているように頭を掻きまわっていた。

河川敷が上がって、道路に出た。交通量はまあまあだ。ここにいれば、相手も迂闊に手を出せないかもしれない。だが、猛スピードで掻っ攫って、人目のつかない場所で殺すこともできるだろう。特に良介と太一はその可能性が高い。ならば――

「もう！ わかんねえ！」 太一の声はもはや叫びに近かった。「わかんねえけど！ とにかく、どうすんだよ？」

「俺が闘う。その間に逃げろ」

二人が危ない。ならば、自分が囹になるしかないだろう。

「はあ！？ そんなことできるわけ……」

「わかった」

「おい！ 良介！！」

「俺たちがいたって、足手まといだろ」

「それは……」

「大丈夫だ。助けも呼んだし」

そうこう言っている間に森林公園に到着した。

怖い。当たり前だ。相手は殺人犯。大丈夫なわけがない。氷室だ
っていつ来るかわからない。逃げたい。逃げるのは簡単だ。たぶ
ん逃げ切れる。

だが、二人はどうなる？ もちろん、自分が逃げたからといって、
やつが二人を襲うとは限らない。杞憂かもしれない。だが、ゼロで
はない。

ならば。二人を護れるのは、今は自分しかない。元・一般人、
現・異能持ちの自分しかない。

ならば。自分が盾になる、それ以外に方法はないのだろう。
もう、関係ない、と逃げることはできない。

第九話 ヤケド

稲川森林公園は市内でも有数の観光名所で、野球場二つ、球技場一つ、それよりも大きい芝生広場、その他バーベキュー場や展望ラウンジなどがある巨大な公園である。何より驚きなのは敷地の半分が森だということである。この公園の広大さが容易に想像できるだろう。

一人たちは意義の良くわからないモニュメントのある入り口を抜け、広場に向かった。そこで男が来るのを待つ。

あたりはもう薄暗く、外灯が灯り始めた。まだ寒い季節だけに一般人はもういない。そうだろうという算段のもと、ここを選んだわけだが、実際に人氣がなくて安心した。

「いいか、俺があいつの気を引いている間に、逃げろよ」

一人は鞆を近くの木の根元に放り投げながら言う。今さらながら、中の教科書類の安否が気になった。

「わかった」

「ああ」

そもそも、男がここにやってくるという保証はなかった。だが、ないならそれでこちらの方がありがたかった。

だが、そんな望みはすぐさま崩れ去った。男が一人たちの通った道を歩いてくる。相手は獲物を決して逃さない獣と化しているのだ。一人は自分の鼓動が速くなるのを感じた。握り締めた拳が汗で湿る。

「行けっ!!」

一人は二人に向かって叫ぶと、目の前の標的に向かって駆け出した。二人は反対方向に逃げるようにしてその場から離れた。

男にも二人が逃げたことは見えただろう。だが、そちらを追うことはなくまっすぐ一人の方に向かってくる。結局は、一人狙いだっ

「よお」

初めて聞いた男の声は、正気の人間の声とは思えなかった。覚えい剤や大麻などでもやっているのではないかと思うほど――実際、やっているのかもしれない――不安定で、線の細い声だった。

「いやあ……色々と面倒かけてくれたなあ？」

「さて、何のことだ？」

面倒ごとはこちらが被っていると聞いたくてたまらなかった。

「別にいいんだけどよお……。さすがに人目につくところじゃあ、殺せないなあ？」

殺す、その言葉に一人は一瞬体を竦ませる。だが、雰囲気飲み込まれてはいけない。そう鼓舞して男の話を聞き続ける。

「まあ……驚いたぜ？ 顔を見られたただけだったら簡単だったのによお……。お前も目覚めたんだなあ？」

目覚めた。男はそう言った。つまり、異能のことだろう。まるでそれが最初から人間に備わっていたかのような表現に、一人は嫌悪感を覚えた。

「だったら？」

「だったら？ 面白くなりそうだなあ……ってよ！！」

男が拳を握り締め、開き、という動作をする。それを見て臨戦態勢に入ったのだと判断する。しかし、男は動かない。不気味な笑みを浮かべたままその場に立ち尽くしている。

どうするべきか迷って、一人は先に仕掛けることにした。一直線に男へと向かい、数歩前で大きく左足を踏み出す。踏み込んだ左足を軸に男の頭目掛けて右足を蹴り上げた。

が、男は体を少し引いてかわした後、右手でいとも簡単に足を掴む。

「燃えな」

一人の右足に熱気が帯びる。ジュツという何かが焼ける音がした。「！？」

男は目を見開いた。

「っ!!! ……うらああ!!!!」

一人はそれをいともせずに、掴まれた足を地面に向かって振り下ろした。男は引っ張られまいと咄嗟に手を離れたが、体勢を崩す。そこを腹目掛けて右腕を振るう。男は両手でガードするも、体がふわりと浮き、一メートルほど後退した。

男はバックステップでさらに数メートル一人から距離を取ると、右手を開閉させながらその掌に炎を作り出す。それをすぐ消すと首を捻る。

「おかしいなあ……」

今度は男から駆け出す。速い。だが捉えられないほどではない。

男は数メートル手前で姿を消す。

右!!!

右を振り向くと男が両腕で一人に掴みかかろうとしていた。それを両肘を合わせてガードをするが、その腕を掴まれてしまう。

「今度こそ、燃えなよ……!?!」

腕に熱が帯びるのを気にせずに、一人は右足を振り上げた。その足は男の顎に命中し、男を蹴り上げることに成功した。一人は腰を低くして、突きを放つ。

「がっ!!!」

男は短いうめき声を上げると、五メートルほど吹き飛ぶ。大の字になって倒れるとしばらく動かなかった。

やれる。

一人に微かな自信が湧いてきた。格闘技なんてやったことはなかったが、それは相手も同じ、やつは能力を得ただけの一般人なのだ。これなら何とかなるかもしれない。帰宅部だが運動神経には自信があるし、一度氷室と闘ったのも大きい。彼と比べれば目の前の男の速さなんて。

氷室が来るまでなら何とか……。

「あー、あー。そーいうことね……」

男は顎を擦りながら起き上がる。首を一周回すと一人を睨みつけ

た。

「川に飛び込んだのはわざとってわけ？」

「まあな」

一人が炎の能力を持つ男に掴まれても耐えることができたのは至極簡単、濡れていたからである。ここに来る前に川を跳び越そうとした時に、跳躍が足りずに川に飛び込んだ。距離が足りなかったのは実力だが、どの道、体を濡らしておけば有利に働くのではという目算があった。

事実、男に足を掴まれても、腕を掴まれても（衣服越しにというのが大きい）熱かったものの、耐えることができた。

一人は制服のブレザーを脱ぎ捨てる。ブレザーの上からでは暗がりではつきりとはわからなかったが、濡れたYシャツが皮膚にくっ付き、濡れていることがよくわかる。

「雨の日は無能だな」

いつだか読んだ漫画の台詞を思い出し、口にしてみた。相手の眉がピクリと動くのがわかった。さすがに挑発しすぎだっただろうか。

「黒島鷹日呂」
たかひろ

「あ？」

「いやあ……。殺されるやつの名前も知らないなんて不憫だと思っ
てよお……！」

そう言うと黒島は両手を広げる。すると両手の掌からバスケットボール大の炎が現れる。

これはヤバイ。一人は直感した。さすがにあの炎は濡れた衣服程度じゃ防げないだろう。あれを喰らえば、大火傷じゃ済まないかもしれない。挑発なんてするんじゃないかと後悔した。

一人は黒島から距離を取る。目をそらさずに、向きを変えずに後ずさっていたが、結局彼に背を向けて、走り出した。広場を抜けて、道の両端を木々が覆っている狭い道へと入る。

森林公園を場所を選んだのは間違いだったかもしれない。黒島が本気を出せばここの森全てを焼き尽くすことも可能だろう。実際、

自分の身を案じればそんな真似はしないだろうが、最終的にはわからない。

とにかく、今は彼に攻撃ができない。さすがにあの火の玉を恐れずに攻撃を仕掛けるのは無謀としか言いようがない。だが、こちらには接近戦以外の攻撃手段がない。このまま逃げ回るだけで、氷室が来るまで持ちこたえられるのだろうか。

接近できないのならば、遠距離から攻撃するしかない。何か投げつけられるものはないかと地面に目を凝らす、薄暗くてよくわからなかった。

このまま鬼ごっこを続けて無事でいられるのか。それは限りなく不可能に近いだろう。普通に街中からここに来ようと思えば、四・五十分はかかってしまう。先ほどは十分で来いと怒鳴ったが、物理的に無理な話だ。

闘うしかない……。

一人は体を回転させた。

……一人は体を三百六十度回転させた。

「無理ッ！」

黒島が手のひらに作り出す火球を想像して、結局怖気づいてしまった。

接近戦はやはり無理だ。

石でもなんでもいい。投げるものが何かないかと目を凝らす、先ほどと一緒に、何も見えなかった。そもそも、道はアスファルトで舗装され、脇は芝が生い茂っている。石なんて見つけやすいところにあるはずがなかった。投擲による遠距離攻撃は不可だ。

あと、やつに攻撃できそうな手段は長いリーチの武器くらいだろうが、そんなものはむしろない。

「……木」

無謀な考えではあるが一つ思いついた。これだけ身体能力が上がっているなら、細い木の一本くらいならば、なぎ倒せるのではないだろうか。木と火、相性は悪いが、大きさに任せて衝撃くらいは与

えられるだろう。

だが……。

森林公園という名が付くだけあって、木々は恨めしいほどに育っている。未だに自分の身体能力を測りきれないものの、いくらなんでも無理だろうと思えるほどの太さの木ばかりだ。

チラリと後ろを振り返る。

「やばっ……」

黒島は追いかけてここに飽きたのか、急に間合いを詰めてきた。

「おうらっ！」

「……ええい！」

下手に逃げ回るよりマシだと思い、足を止めて迎え撃つ。

燃え盛る黒島の右手が迫ってくる。

バランスを崩すようにしてそれを避けた。素早く体勢を整えて、今度は一人から仕掛ける。

右の拳を黒島の顔面めがけて振るった。

「……………！」

「捕まえた」

黒島が気味悪い笑みを浮かべる。一人の右手は黒島の両手に阻まれる。そして、熱を帯びていく。

「熱ッ！！」

「逃がさねえよ」

「うっ、うらあああ！！」

がむしやらに右足を振り上げる。黒島には当たらなかったが、それを避けようとして手が離れた。

「うう……」

右手が熱い。痛い。言わば、ガスコンロに手を突っ込んだのと同じなのだ。

もう嫌だ。近づきたくない。

そう思いながらも、黒島の右手が再び迫る。屈むようにして避け、彼の腹部を狙う。右手は腹部にしっかりと入ったが、黒島は短いう

めき声を上げただけで、耐えた。ふと、睨む黒島と目が合った。今の攻防が怒りを買ってしまったらしい。

「いい加減にしろよ……。そろそろてめえはおとなしく殺されろや！」

黒島が怒鳴る。

それでも、ひるんだ一瞬の隙を突いて、一人は距離を取る。これ以上は、やっていられない。一人は再び走り出した。

二人の距離は縮まらないが、広がらない。一人は高校生二人を抱えて、数キロを走ってきて息が上がっている。黒島も能力に目覚める前は大きく運動とは縁がなかったのだろう。二つの要因があつて、この均衡が保たれている。

一人は十メートルほど後ろの黒島を見る。完全に怒りに任せた表情を浮かべている。捕まれば、猶予なく灰にされてしまうだろう。

「くそっ!! 早く来いよ、あの野郎!!」

まだ姿を現さない氷室に向かって悪態をつく。もしかしたら既に来ているのかもしれないが。問題はこの公園の広さだ。一口に森林公園にいるといっても、簡単に見つかるものではない。

公園を半周ほどした頃、突然、携帯電話が鳴った。今日ほど防水で助かったと思うことはないだろう。出ている暇などないが、もしかしたら氷室かもしれないと思い、確認もせずに通話ボタンを押す。

『一人! どこだ?』

想像よりも高く、若い声が聞こえてきた。

「良介!? 何やってんだよ!」

『いいから! 最初の広場に建物があつたら? 管理室だ。その辺まで来い!』

電話が切れる。二人は逃げたのではなかったのか。どうするべきか。彼の指示に従えば、間違いなく二人を危険に晒す。かといってこのままではいずれまた追いつかれてしまうだろう。良介は何か策があるような言い方だった。

「クソッ!!」

少し迷って一人は方向を変えた。

第十話 ビショ濡れ

「あれか……」

一人は良介に電話で言われた通り、最初の広場に戻ってきた。

この広場は公園の南東にあり、北へ、そして中心部を通って戻ってきたため、公園の半分ほどを走りきったことになる。「こんな体」じゃなかったらとくに疲労困憊で倒れていただろう。

もちろん、今も息は上がって、汗は噴き出し、もう走りたくなかった。

確かに、広場の脇に大きな建物があった。最初は公衆トイレかと思っただが、それにしても大きいし、良介の話だと管理室らしい。

その前に二人がいるのが見えた。だが、並んではない。良介が前に出て、何かを抱えている。太一が奥の方で何かをしている。

「何やってんだよ!!」

「伏せろ!」

一人の質問に答える暇もなく良介が叫ぶ。それにしたがって一人は身を伏せた。すると、一人の頭上を大量の水が通過していった。

二人が用意したのは消火栓だった。良介がホースを持って、太一がハンドルを回していた。

ホースから大量に放たれる水は見事に黒島に命中した。

この行動は黒島能力を知っていないかと思いつかないだろう。ならばどこかで見ていたということになる。逃げろと言ったはずなのに。

「お前ら、どこでやつ?!」

「お前置いて逃げられるわけないだろ! 最初から物陰に隠れて見てたんだよ!」

わかったと言いながら、最初からそんな気はなかったようだ。

「てめえら、ふざけんなよ!!!!!!」

最初水圧に圧倒されていた黒島だが、水を避けて、こちらに駆

けてくる。

一人は咄嗟に構えようとしたが、体が言うことを聞かなかった。やはり疲労が溜まっているようだ。体が反応したところにはもう遅かった。

数メートル吹き飛ばされる。

「つく！」

それでも、何とか受け身を取って体勢を整えた。芝の上だったのでそれほど痛みはなかった。

だが、起き上がってみると、黒島が良介の首に手をかけているところだった。

良介の表情が痛々しい。

「良介！」

太一が水を止めることもせずに駆け寄ってくる。だが、どうすることもできないのを悟ってか、距離を取って足を止めた。

「クククッ……」

黒島のケダモノのような目に吐き気を覚えた。

「濡れてるから何だってんだ。このくらい何ともねえよ」

このままでは……。

「燃えろ、クズ」

「やめろおおおおお！！！！！！！！」

初めてだ。初めて自分で意識して、一人は黒島のすぐ横に『移動』した。

「なっ！？」

数メートル先にいたはずの一人が自分のすぐ横に一瞬にして移動したのを見て、黒島は唾然としている。

一人はその黒島の横っ腹に蹴りを入れる。うめき声を上げて良介

を手放したところにもう一度蹴りを入れ、黒島を吹き飛ばす。

「良介!!」

太一が駆け寄ってくる。良介は咳き込みながらも、大丈夫だ、と答えた。

「お前ら、今度こそ逃げろよ」

「逃げる暇なんてねえよ」

太一が答える。

「ああ、その通りだ」

黒島が起き上がり、地面に唾を吐きながら言う。

「てめえら全員、黒焦げにしてやる!!!!」

黒島は両手に先ほどより大きな炎を作り上げた。

「……下がってろよ」

一人のその声に二人は頷き、数歩下がる。

これまでのまとめ。

やつは手からしか炎を出せない。全身に炎を纏えるのだったら、一度も蹴りの攻撃をしてこなかったのはおかしい。

そしてもう一つ、炎を飛ばすことはできない。できたならとつくにやっているはずだ。

つまり、対策は遠距離で闘うか、もしくはやつの死角に回り込むか。

遠距離攻撃は道具がない。

死角に回り込むなんて、簡単にできない。そう思っていた。

だが、今ならできる。

「高木一人」

「あ?」

先ほどと逆の構図になる。

「いや、倒された相手の名前も知らないなんて、不憫だと思ってさ」
そういった瞬間、一人は、消えた。

「な!?!」

一人は、黒島の背後上空に『移動』した。足を振り上げた体勢で

空中に現れた。黒島は気付いていない。

「うらあああああ！……！！！」

そしてそのまま足を振り下ろす。

声に反応して振り向こうとした黒島の脳天を直撃した。よろめいたところに、背中に肘打ちを浴びせて突き飛ばす。

「こ、……のっ！」

立ち上がった黒島は、炎の出ている手で一人に殴りかかるが、虚しく空を切る。一人は黒島の左に『移動』し、頬に拳を打ち付ける。続けざまに横っ腹に右足を捻じ込む。

「ふざけんな……ちくしょう！」

自棄になった黒島はただ真っ直ぐに一人目掛けて炎の拳を振るう。これならば避けれる。能力を使わずにかわすと、膝蹴りを腹に、蹲ったところで蹴り上げる。

「はあ、はあ………？」

いける。そう確信したかったが、体の調子がおかしい。息が切れってきた。スタミナが切れかかっているのだろうか。

「調子に乗るんじゃ」

黒島は血走った目で一人を睨む。右手に大きな火球を作り出す。

「ねえよ！！！」

真っ直ぐに向かってくるが、思ったより速い。自力では避けきれないかもしれない。能力を使おうとして、それは一人に、

命中した。

「なっ……」

なぜ？ どうして？ さっきまで完全に使えていたのに。

吹き飛ばされ、服に火が燃え移る。転がって火はすぐに消えたが、立ち上がるうとしても、体に力が入らなかった。

「あらあらあ？ もう終わりかあ？」

一昨日のことを思い出す。最初に能力が発現したときのことだ。

あの時、屋根の上に上った瞬間、体が重くなった。

能力の使いすぎ……？

今日は三回能力を使った。つまりこれが限界値。三回使うと能力が使えなくなる上に、体の疲労も凄まじいものになるということか。つまり、

ここで終わりか。

もう、反撃する力は残っていない。太一と良介が何か叫んでいるがそれももう聞こえない。

黒島がすぐそこまで来ていた。

「終わりだなあ」

「お前がな」

低い声をする。そして、冷気が周りを包む。

「あ？」

瞬間、黒島は氷漬けにされていた。

芸術品にしては酷く醜いオブジェクトになった。

「遅えよ」

「そう言うな。それでも飛ばしてきたんだ。立てるか？」

黒島の後ろには氷室が立っていた。

氷室は手を差し伸べる。だが、一人はその手をとることすらできなかった。むしろ完全に力が入らなくなってその場に大の字に倒れこむ。

「立てねえよ」

「一人……！」

太一と良介が駆け寄ってくる。二人は一人の両脇に立って彼の肩を担いだ。

「大丈夫か？」

「大丈夫に見えるか？」

「見えないな」

「おい、三人。離れとけ」

氷漬けにされた黒島の両手が明るみを帯びていく。それに危険な

ものを感じ取った二人は一人を担いで後ずさった。

赤みを帯びていたそれはやがて炎となって氷を溶かし、熱が伝わって全身を完全に溶かした。

氷漬けになっている間、脳や心臓はどうなっているのだろう。氷室が来たことで一人にはそんなことを考える余裕さえできていた。

黒島は肩で息をしながら、氷室を睨みつける。

「てめえ……また、邪魔してくれたな」

「てめえのせいでクビが飛びそうだ、面倒くせえ」

こんな時だというのに氷室は黒島から目を離し、ポケットを探った。どうやら煙草を探しているらしい。

「うるせえ！　ぶっ殺してやる！！」

黒島は駆け出す。一直線に氷室に向かうと寸前で飛び上がった。

氷室の背後に回ると、右手から炎を出し、氷室に殴りかかる。

氷室は煙草を探すのを諦めた。

「氷のてめえじゃ炎の俺には勝てねえよ！！」

だが、氷室はその拳をいとも簡単に避けるとカウンターの右を黒島の顔面に打ち付ける。

「なっ！？」

黒島は十メートルは吹き飛んだ。しかし、それに留まらず、すぐさま追いついた氷室は彼を蹴り上げる。

「かっ……！」

浮き上がったところを左手で背中を押さえ、右で腹に三連発。

うめき声と多少の血を吐いて黒島はその場に蹲る。

「はっ。確かに俺とてめえじゃ相性が悪いわな。だがな、相性だけで勝負が決まったら面白くねえだろ。てめえなんざ、力を使わなかったって伸してやるよ、格下」

「クソクソクソクソクソ！！！！！！！！」

「下品だなあ、おい」

「うるせえ！　うるせえ！　バケモノが！！」

「お互い様だろうよ」

「死ね!!」

黒島は左フックを仕掛ける。だが氷室は難なくその手首を掴む。だが、黒島はニヤリと笑みを零す。

「は、燃えちまえ! がっ!？」

掴んだその手に炎で攻撃を仕掛けるつもりだったのだろうが、それよりも先に肘から先が凍りついた。すぐに振りほどいて距離を取った。右手でその氷を溶かす。

「クソがあああ!」

彼は怒り心頭でがむしゃらに突っ込む。

「クソクソ言い過ぎだつての」

嵐のような、いや、氷室にとってはそよ風程度の攻撃なのだろう。それを氷室はほとんど受け流す。黒島の息が上がってきたところで、蹴り飛ばした。

黒島は地面に力なく倒れこむ。体をわなわなと震わせながらも立ち上がったが、その表情は恐怖が現れていた。

「もう、いいや……」

「お、諦めたか？」

「みんな燃えちまえ!!」

黒島は両手を高々と上げ、炎を生み出す。その様は邪悪な悪魔にも見えた。

その手を勢いよく振り下ろし、芝で覆われた地面へとかざした。

「ああ、面倒くせえ……」

「やばい!」

太一が叫んだ。黒島は両手の炎でこの公園の芝を、木を、森を焼き尽くす気らしい。そんなことをすれば黒島本人も無事では済まないだろう。

芝に引火した炎は瞬く間に広がっていく。

「逃げるぞ!」

良介が言い、一人を抱えなおした。だがそれを一人は振り払った。

「大丈夫だよ」

一人は冷静に言う。このくらいで事態が逆転するほど氷室は弱くない。そんな確信があった。あつてたかが数日だが、曲がりなりにも直接闘ったのだから、彼の実力は嫌でもわかる。自分と戦ったときは力を抑えていた。そして今も。

だから、全くもって心配していなかった。

「ほら」

急に炎が消えた。黒島は信じられないという表情をしている。氷室は片膝をついて右手を地面に添えていた。芝はといえば、すでに凍り付いていた。一人たちのあたりまで霜が降っている。

氷室は立ち上がると、再びポケットを探り、今度こそ煙草の箱を取り出した。

「火、貰ってからでも良かったな」

「畜生……」

冗談だ、そう言ってすぐに箱をしまう。

「さて、終わりだな」

氷室の姿が消えた。正確には高速で動いているだけだ。黒島の背後に回りこむと腕を締め上げて、押し倒す。そして手錠をかけた。一瞬だった。

「はっ、こんな手錠くらい……?」

彼は炎を出そうとしているようだが、うまくいっていない。

「残念、特注品だ」

黒島の能力なら、手錠くらい簡単に溶かすことができるだろう。それができないということはあの手錠に何か仕掛けがあるのだろうと一人は考えた。置換機といい、その手錠といい、能力以外にも信じられないものが多すぎる。

氷室は黒島を目で威嚇したまま携帯電話を取り出し、電話をかけた。話の内容からするとどうやら相手は有澤らしい。十分後、パトカーに乗った有澤が到着した。

「よく頑張ったな」

「は。元はてめえが逃がしたんだろ」

「……耳が痛いな」

有澤と数人の警官が黒島を連行していった後、その場には一人、氷室、太一、良介と最初からいたメンバーが残った。一人は立てるほどにまでは回復していた。

これからある作業が残っている。

「さて、一人。そろそろ説明してもらおうか」

良介が眼鏡を直しながら言う。その睨みつけるような眼光に一人はたじろいだ。

「そうそう。説明してもらわなきゃな」

太一が首を縦に振って激しく同意している。

「別にあなただでも構いませんよ。えと、氷室さんでしたっけ？ 一人とはどういう関係なんです？」

「面倒くせえ」

氷室はそれしか言わない。良介は肩を竦めると再び一人を睨み直した。

「怖えよ。睨むなって」

「じゃあ、説明しろ。何なんだこれは。全く理解できない。何が起きてる？ 何でお前が？ おかしすぎる。屋根の上まで高く跳んだかと思えば、火を出し、氷を出し。異常すぎる。何だこれは！？ 夢か！？ 夢なのか！？」

良介はダムが決壊したかのように早口でまくし立てた。今まで冷静だったのが嘘のようだ。今までの嘘だったのかもしれない。

「まあまあ、落ち着けて」

「説明しろ！」

「わかったよ」

一人はポケットからライター状の物、置換機を取り出し、良介の目の前に持っていた。

「何だそれは？」

一人は黙って置換機のスイッチを押した。小気味よい爆発音をたてると、良介はその場に倒れこんだ。

「悪いな」

良介が倒れたのを見て太一の顔が恐怖で引きつる。その表情に胸が痛みながらも太一にも置換機を使用する。

「忘れてくれ」

太一もその場に倒れこむと、一人は置換機をポケットにしまい込み、ため息をつく。

気絶した二人を氷室はいとも簡単に担ぐと歩き出した。駐車場に向かっているようだ。一人もその後を歩く。

「しかし……」

しばらくあって、氷室が口を開いた。

「よく持ちこたえたな。初めてなのに」

「あんたと闘っておいてよかったよ」

「だろ？」

「皮肉だコノヤロウ」

そうは言ったが、半分は本心だった。

「まあ何だ」氷室は一度舌打ちをしながらも会話を続ける。「お前はセンスがある」

「は？」

急な話題転換に思わず声が出る。

「まだまだ荒いが、磨けば光るものがある」

「何言って……」

「非常勤にならないか？」

一人はそのとき何を言われているのかわからなかった。だが、とても良くないことなのだろうということだけはわかった。

第十一話 忘れ物

目覚まし時計が鳴る。それをベッドから起き上がることなく、手探りで止める。そして、もう一度惰眠を貪り、五分後、再び鳴った目覚ましで今度こそ起き上がる。

彼の起床パターンの中ではこれが一番多い。

これが高木一人の日常。そう、日常。

のそのそと動き出し、準備を始める。

黒島の事件からひと月ほど経った。太一と良介は嘘みたいに事件のことを忘れていたし、これといって事件に巻き込まれることはなかった。

そうして、ちよつとずつ日常に戻っていった。なかなか寝付けなかったり、眠りが浅く朝早くに起きてしまうこともままあったが、最近はそのいったことはめっきり減っていた。そうして日常に戻っていく。

そうだったらしいのに。

確かに、目に見える変化はない。氷室との接触も今はほとんどないし。ニュース、新聞を見てもおかしい事件はない。あったとしても、自分には関係ない。そう、関係ない。

だが。

それでも、確実に自分の体には異常が起きている。それは間違いなかった。加減をしなければ、吃驚人間ショーに連れて行かれるほどの身体能力、いや、それどころでは済まないだろう。

異常なほどの足の速さや腕っ節の強さ。やろうと思えば軽々と民家の屋根に上ることができるし、蹴り飛ばせば大の大人を軽々と吹き飛ばすことができる。

日常には戻れない、それを思い知る。

「非常勤、ね……」

さらなる憂鬱の種が氷室のスカウトである。ここ数週間は接触は

ないものの、最初に聞いたときはわけがわからなかった。

非常勤。

その名の通り常勤に非ず。その職業は警察官ではない。もしかすると職業ですらない。端的に言えばアルバイトだ。

普段は何事もなく生活してよい。ただ、何かあれば呼び出され、闘う。異能の犯罪者と、闘う。

一刻を争う状況になれば、特命部だけでは対処に遅れる、そんな時に必要な人間たちだそうだ。

もちろんそれには死が纏わり付く。死んだって文句は言えない。

その分報酬は多分にあるらしい。そんなものに誘われたのだ。

そんなもの誰がやるか。冗談じゃない。

だから言ってやった。ふざけるな、と。

そしたら、あいつは笑いやがった。そりゃそうか、と。

そして、こう続けやがった。ま、考えといってくれ、と。

「やってられるか」

一人はため息をつく。そして、家の扉を開けた。半袖にはまだ早い、だが確実に温かくなりつつある五月の風を全身に受けた。

「あ、やべ」

二時間目の数学が終わり、次の英語の準備をしていると、予習をしていないことに気がついた。普段なら別にいいか、となるのだが、今日は確か自分に当たってくるはずである。英語の教師は、未だにチョークを投げつけるという前時代的な教師で（はたしてチョークを投げる時代が本当にあったかについては疑問の余地が残る）、当たるとなかなか痛い。成績に響くのも痛いので何とかしなければいけない。

一人は立ち上がり、良介の席まで行く。

「良介、ノート見せてくれ」

参考書を読んでいた良介はチラッと一人を一瞥すると、そのまま参考書に視線を落とした。

「おいこら」

「何だよ。ああ、確か今日はそっちの列だったな。ふうん」

「貸してくれよ」

良介は参考書を閉じると一人の方を向き直した。そして、俯き加減に眼鏡を直し、上目で一人を見た。眼鏡のレンズに蛍光灯の光が反射して表情は見取れない。

「……貸してください」

良介の態度に気おされて、一人は下手に出た。

「ただじゃないぞ」

そう言つて良介は英語のノートを差し出す。

「始まる前に返せよ」

「わかりました」

急いで席に戻ると、自分のノートを開き、無心で書き写す。すると前の席の太一が振り返った。

「あーあ、いーけないんだ、いけないんだ。せーんせーに言つてやろー」

「うるさい。死ね」

邪魔をするな、と一人は太一を無視して黙々と作業をこなす。作業であつて勉強ではない、確かに身にならないがチヨークを飛ばされるよりはマシである。

「いいのかなあ。一人様とあろう者が、宿題を書き写すなんて真似していいのかなあ？」

「いい。うるさい、話しかけんな」

「いやあ、嫌んなっちゃうなあ。こんな不真面目な生徒に成績で負けてしまうなんて」

そういう太一は学年はおろか、クラス内でも下から数えた方がはるかに早い。そんな彼に成績の話をされるのは癪に障る。そちらのほうの不真面目な生徒だろう、と一人は思う。

とりあえず、脳天に一発入れて黙らせることにした。

散々なじった挙句、自分は予習をしていなかった太一は教師のチ

ヨーク攻撃をモロに喰らっていて、ざまあみろ、と思った一人だった。

「一人、これ職員室に持っていつてくれ」

三時間目の数学を無事に乗り切り、四時間目の地学も睡眠という手段で難なく乗り切った一人だったが、良介の持ってきたプリントの束に閉口する。これを持っていったら昼飯が買いに行けないではないか。

「えー」

ひとまず、一人は抵抗してみることにした。できるだけ不満そうな顔をして、良介を見上げる。しかし、良介の表情は揺るがない。動かざること山の如し、とはこういったことを言ううのだろうか。

「ノート貸してやったのは誰だ？」

「だって、飯食えないのは辛えよ」

今度は不満そうな顔から不憫そうな顔へとシフトする。

「俺だって嫌だ。いいぞ、金輪際ノート見せてやらないから」

「わかったわかった！ 行きゃあいいんだろ行けば」

「わかってるじゃないか。ほら、太一行くぞ」

「おう」

頭上にタンコブを作り、額がやけに白い太一は何だか不憫に見えた。だが、あいつが悪いんだと気にしないことにする。

「何か買ってきてくれよ」

そのタンコブを作った張本人だが、そのことは忘れてくれ。

だが、太一は手を耳に当てて「聞こえない」のポーズをするだけだった。この鬼畜め。

「一人、購買行くの？」

花梨が話しかけてくる。

「あ？ 職員室だよ。見りゃわかんだろ。まあ、その後で行くけどよ。パシリは勘弁だぜ」

「そんなんじゃないし」

「じゃあ、何だ。言ってみろ」

「あ、いや、その……」

花梨は両手の指を合わせたりしている。何やら言いづらそうにしている。

ほらみろ、パシリじゃねえか。

一人は二階にある職員室へとプリントを届け終えた。おそらく、これから直接購買に行っても何もないだろう。太一と良介が何か買ってきてくれるのを祈るしかない。

「あ、高木」

誰かに呼び止められて一人は声の方を向いた。

「ああ、高島か。どうした？」

隣のクラスの男子だった。野球部で、わりと話す方だが、きつかけは思い出せない。だが、友人とはたいいそのようなものなのだろう。

坊主頭の少年は職員室から出てきたところだった。おそらく一人と同じように何かの仕事があったのだろう。

「これから体育館でバスケやるんだけど、来る？」

「バスケか……。いいよ、行く。けど、途中購買寄ってもいいか？飯買ってないんだ」

「ああ、ドンマイ。どうせねえよ」

「だろうな」

そう言いながら職員室横の階段を下りる。

図書室の前を通りかかったときに、先のゴミ捨て場のところで目についたものがあった。

収集車に運びやすいように外と繋がっているそのゴミ捨て場は、教室清掃のときにまとめてゴミを捨てに来る場所であって、そこに個別に捨ててはいけなかった。

収集しやすいように分別されてゴミ箱にまとめられている。そのゴミ箱とゴミ箱の隙間に無造作に何かを投げ捨てた男子生徒三人組

がいた。彼らはこちらに気付いていないようだった。

彼らは楽しそうにそれを捨てると笑いながら去っていった。

「何だ、あいつら？」

高島が首をかしげる。

一人はそれを拾い上げた。それは数冊の教科書だった。

「……世界史、数学、理科総合。一年六組山本俊明」

「それって、あれだよな？」

「あれだろ」

「こんな進学校にもあったんだな」

「みたいだな」

「どうする？」

「さあ？ とりあえず、とどけるよ。高島、バスケ行っているよ」

「いいのか？」

「いいよ。来たいなら別だけど」

「あー、そう、だな……。じゃあ、任せた。また今度な」

居心地悪そうに高島はその場を去っていく。

一人はため息一つついて一年生の教室がある四階に向かうことにした。廊下を曲がったところで誰かとぶつかってしまった。

露骨な舌打ちが聞こえてきた。

「悪い、大丈夫か？」

舌打ちされたのを我慢して尋ねる。相手の男は一人を睨んだ。

「……痛いじゃないか」

「謝ってるじゃねえか、堀田」

堀田冬二。隣の四組の男子で、見るからにガリ勉である。だが、実は運動は得意という話である。学年で数少ないオール五を取れる生徒だろう。

一人は彼が苦手である。というより、彼が一人たちを敵視しているのである。

「……佐野くんに言っておいてよ。次は負けないから、って」

「知らん。あいつはそんなこと興味ねえぞ」

彼は定期考査で毎回学年二位である。一位は実は良介である。だから彼は良介を、さらに良介と普段一緒にいる一人や太一を敵視しているのである。

「ふん。負けたときのいいわけかい？」

気味の悪い笑みを浮かべると堀田は歩いていってしまった。

「だから、興味ねえって」

聞こえないように呟いて、一人はそのまま階段を上がっていく。つい数か月前まで通っていた四階まで行き、六組の教室を覗きこんだ。

（ああ……）

思わずため息が出そうになった。

雰囲気が悪い。何がそうさせるのかわからないが、たしかにそう感じる。山本という少年には悪いが、妙に納得してしまう。

「なあ、山本ってやついるか？」

一人は入口の近くの男に話しかけた。

彼は黙って指を差した。

「……どれ？」

「あの、一番奥のやつ」

「ああ、ありがとう」

一人は礼を言って一番窓側の一番後ろで一人にいる少年のところまで歩いていった。

「山本君？」

一人がそう呼びかけると、少年は少しだけ顔を上げた。前髪は目が隠れるほどまで伸びていて、表情はうかがいにくい。ただ、全身からおとなしいというか、あまり良くない雰囲気が出ていた。

「あの、これ。落ちてたから」

一人は教科書を差し出した。少年は黙ってそれを受け取った。少しだけ頭を下げたように見えた。

「じゃ」

少年が何も話さないので、そのまま一人は教室を出た。

昼休みに居心地の悪い時間を過ごしたが、その後は特に何もなく、日常、常の日と呼べる一日だった。教科書を届けた後、急いで購買に行ってみたものの、何もなかった。無論、二人は何も買ってきてくれていなかった。午後を空腹で過ごし、放課後は三人で帰り、途中でコンビニに寄って腹を満たし、駅前のゲームセンターで遊んで、程よく金をばら撒いて帰宅した。そんな一日。何もない一日。

こんな日がずっと続けばいいのに。

夕食を済まし、二階の自分の部屋に籠る。数学の宿題をするためだ。本当は面倒だったが、さすがに二日連続で良介が見せてくれるとは思えない。なんだかんだで頑固なやつなのだ。

英語の持田、数学の米田は学校でも有名な鬼教師で、宿題を忘れた生徒、授業態度の悪い生徒には容赦がない。なぜそんな教師二人そろって教科担任なのだと、一人のクラスでは不満が募っている。

要するに宿題をしないとマズイということである。

「しまった……」

だが、鞆を漁って、肝心のノート、教科書がないことに気がつく。冷や汗が背中を伝う。たかだか、宿題くらいで冷や汗が出る自分を情けないと思った。

時計を見ると八時を回っていた。正直なところ面倒くさい。しかし、明日のことを考えると、何とかしなければいけない。これが数学でなければ完全に放置するのだが。

選択肢は、学校に取りに行くか、明日の朝に早く登校するかだ。

面倒をとるか、睡眠をとるか、両者を天秤にかけると、それはグラグラと揺れた。やがて、沈んだのは睡眠の方だった。

仕方ないか。学校までそんなに遠い距離ではない。わざわざ宿題をするために学校に戻るなんて、なんて自分は真面目な生徒なのだろう、などと冗談めいたことを思った。

一人は家を出た。

今日こそは、と思ったのだが。

というより、今日を逃していつ、という話である。

「はあ……」

花梨は自室の机に頬杖を突いてため息をついた。ああ、幸せが逃げた。そう思うともう一度ため息が出そうになるが、悪循環に陥るので我慢。

数学の宿題をやっているが、ちっとも進まない。毎日チャンスを逃しているから、普通はへこたれないのだが。失敗することがルーティーンになりつつもある。

だが今日は、本当に絶好の機会だった。本当に柑奈に詰られた。ひどい言われようだった。

「だってねえ……。幼馴染ってのは大変なんだよ」

十年を掛けて構築された距離。それは近いようで遠いようで。問題は遠近よりも、その距離を変えることの難しさである。

「縮まらないなあ……」

言うなれば二人の距離は姉弟みたいなもの。

姉弟みたいなもの、という関係は事実だし居心地はいいけれど、縮まる気配を見せないその距離は……。

もどかしい。

いらいらする。

悲しい。

腹立たしい。

様々な感情が渦巻いている。手当たりしだいミキサーに詰め込んでかき交ぜた得体の知れないジュースみたいだ。よくわからなくて、飲まずに排水溝に捨ててしまいたいけれど、どうやら排水溝は詰まっているようだ。

何度こんな気持ちになっただろう。何度自分が嫌になっただろう。花梨は腕の中に顔を埋める。

傍らに置いていた携帯電話が振動する。学校から帰ってからマナ

ーモードを切るのを忘れていた。マナーモードにし忘れて学校に持っていくよりは全く問題はないのだが。

誰だろう、と思うがどうせメールだろうと、後で読もうと、放置する。だが、携帯電話は振動を止めない。どうやら電話のようだ。

ゆっくりと起き上がり、ディスプレイを確認する。そして、名前を見てため息をついた。

「ああ、幸せが逃げた……」

当たり前といえば、当たり前である。

「まいったな……」

夜八時を過ぎているのである。高校生にとってはまだ早い時間である。だが、学校にとってはそうではない。校則で部活は七時まで、八時には完全に施錠される。帰宅部の一人はそんなことは忘れていて、学校に到着してから気がついた。

「どうすっかな……」

一人はその場に立ち尽くしながらも頭を働かせる。たしか、警備員はいい加減だと聞いたことがある。そして、一人のクラスの清掃もいい加減である。

「よし」

一人はまず、正面玄関の庇屋根の上に飛び上がった。そして次に三階の窓に向かって飛び上がる。窓の縁に器用に乗りかかるとそのまま左に教室一つ分、二つ分と飛び乗る。そこが一人の教室である。不安定な体勢ながらも窓の施錠を確かめると、三つ目の窓が開いていた。

たかが宿題のためにここまでしていることに情けなくなり、嫌がりながらも異能をいかになく利用している自分に嫌気が差したが、済んだことは気にしないといい聞かせて教室に入り込んだ。

「……………は？」

一人は目の前の状況に目を疑った。

クラス中の机が切り刻まれていたのだ。

室内は暗くてよく見えないが、間違いなく切断されている。まるでジャガイモを切ったかのように机が切断されていた。切り口は鋭利で、一太刀で切ったようだった。かなり切れ味はいい。

自分の机があった場所まで向かい、机の残骸を漁る。そして数学の教科書とノートを発見する。切り刻まれてはいなかった。名前なんて書いていなかったが、間違いなく自分の物である。

「さーて、目的の物も見つかったし、帰るか。……とはいかねえよなあ」

一人は携帯電話を取り出し、電話帳から目的の宛名を探す。できれば掛けたくない番号だったが仕方がない。この状況を見れば原因は一つしかない。

数度のコールの後、相手に繋がった。

「どうした、非常勤になる覚悟でもできたか？」

開口一番にそれである。口には出さなかったが、黙れ、と内心で思った。

「違えよ」

氷室には以前の事件のときに連絡先を聞いておいた。特に連絡はしたくないのだが、何かあったときに困るためだった。

そしてふと思う。いつか彼が言っていた、『見えないものが見える』とはこういうことなのかもしれない。

今回は明らかに異能のせいである、とわかるものだったが、もしかしたら今まで気がつかなかった、見えていなかったものが異能によるものである、という場面が出てくるのかも知れない。

「まさか、また追われてるとか言うんじゃない。面倒くせえ」

口癖でつい出てしまった、というよりは、本心から面倒くさいのだろうと思わせるような気だるさを感じ取れる声だった。

「面倒くさがるな。仕事しろ仕事。まだ襲われちゃいねえよ」

「まだ？ 何処だ？」

「稲宮高校」

「……ああ」

「気のねえ返事すんな！」

「大丈夫だ。非常勤が向かってる」

「へ？　もう？」

「特命部舐めんなよ。こちとら立派な情報網持ってるんだ。俺も今からそっちに行くところだ。まったく、定時に帰れる仕事についてみてえなあ。まあいいや、おめえはさっさと帰りな」

「ああ、そうかい。じゃ、遠慮なく」

一人は電話を切った。何故だかわからないが、既に非常勤が向かっているらしい。ならば自分にできることはない。後は勝手にやってくれ。

その時、廊下から足音が聞こえた。

犯人か？

非常勤か？

どちらにせよ見つかる前にこの場を離れた方がよさそうだ。

だが、そう判断して動こうとした瞬間、机の切れ端（何とも滑稽な表現だろう）を蹴飛ばしてしまい、鈍い金属音が響き渡る。足音が早くなった。

教室の電気がつく。

「え」

「……………一人？」

そこにいたのは果山花梨だった。

第十二話 知りたくなかったこと

「……一人？」

紺のバギーパンツに紺のブルゾン。髪は左右で結ばれている彼女は紛れもなく果山花梨その人である。彼女の服装に対して一人は黒のジャージ上下とお粗末な格好だったから、少し気恥ずかしかったが、今はそれどころではない。

「……何してんだ、花梨」

「一人こそ」

彼女の表情はとても奇妙なものだった。読み取れない。感情がないのではなく、読み取れない。驚いているのか、悲しんでいるのか、はたまた喜んでいるのか。また、そのどれもなのかもしれないし、どれでもないのかもしれない。能面のように、表情はあるのにわからない、そんな表情だった。

「俺は数学のノートを取りに来た」

違う。そんなことはどうでもよい。今話すべきはそんなことじゃないだろう。そうは思いつつも言葉が出てこない。喉の奥では信号の無い交差点のように言葉が右往左往している。

「そう……」

彼女はそう言うが納得しているようには思えない。他人が見たらあまりにも不自然な光景だろう。バラバラになった机に囲まれて男女二人が数学がどうのと話している。有り得ない。

彼女は視線をずらす。彼の後ろの開かれた窓を見ている。気づかれただろうか。否。その前からわかっていることだ。

「ねえ、一人」

花梨は神妙な面持ちで口を開く。今なら表情が読み取れる。だが、一番近いと思った感情は、悲痛、だった。

「一人”も”非常勤なの？」

聞きたくない言葉だった。脳がその言葉を咀嚼しない。拒食症に

なった脳がその言葉を拒否する。受け入れられない。

「お前”は”非常勤なのか？」

否定の意味を込めてそう答える。

「……うん」

ほんの少しの躊躇いの後に、彼女は頷いた。

「そうか」

だからどうした。自分には関係のないことだ。どうすればいいというのだ。

……本当にそうか？ 関係ないのか？ 十六年間の人生で、一番近くにいた幼馴染が。

「何で……」

言葉が続かない。「何で黙ってた？」当たり前だ。話せるはずがない。「何でそんなことを？」知ったことか。どれもが適切であり、不適切であった。

「みんなを、護るためだよ」

知らない。そんなこと知らない。

「だって……」

誰にだってできるだろ。氷室だっているんだ。

「私にしかできないから」

違う。能力者なんて一杯いる。警察の地下に行けば能力者なんて大勢いるんだ。

花梨は首を横に振る。

「私は能力に目覚めた。だったら、私にしかできないことがあるはず」

「死ぬんだぞ……。下手したら死んじゃうんだぞ！」

「わかってる」

「わかってない」

「わかってる！ 私はわかってる。だから、一人もわかって……」
何をだ。冗談じゃない。

彼女はそれ以上言葉を繋がなかった。一人も何も言えなかった。

過剰なまでに重い空気が教室に充満していく。

「今は」

長い沈黙の後、一人は言葉を搾り出す。

「話してる場合じゃないんだろ？　これをやったヤバイやつがいるんだろ？」

そう言って、足元の机の残骸を蹴り飛ばす。虚しくそれが音を立てる。

「……………うん」

「じゃあ、そっちを何とかしよう」

帰れなくなっちまったじゃねえか。

確認した結果、少なくとも三階の普通教室、つまり鍵の付いていない教室はほとんど被害にあっていた。無残なまでに瓦礫と化した机が虚しく佇んでいる。明日はおそらく休校だろう。授業ができない。

「四階も、駄目だったよ」

花梨が言う。彼女は一人より前に来ていたらしい。既に確認済みのようだ。

「じゃあ、次は下か」

その時、下の階で大きな音がした。一階か二階か、とにかく二人は階段を駆け下りる。

中央階段を下りると、右手から音が聞こえる。花梨は廊下の照明をつけた。

一番奥の教室から一人の男が出てきた。

「あいつ……………」

「知り合い？」

「いや、知ってる。けど、知り合ってはいない、たぶん」

彼は一人が届けた教科書の持ち主だった。

「たしか、山本なんとか……………」

彼は制服のままだが、ブレザーを脱ぎ、Yシャツの袖とズボンの裾を捲り上げている。昼休みに体育館でバスケットボールの興じている高校生と同じ格好だが、この場でそうしている意味がわからない。そもそもここにいる意味もわからない。

「誰ですか？」

少年は微かな声で尋ねた。

「僕の邪魔をするんですか？」

少年は続ける。

「そうだよ」

花梨が静かに告げる。一人は何も言えなかった。

「……力を手に入れたんだ。これであいつらなんか。あいつらなんか目じゃない。あいつらに勝てる力を、あいつらを殺せる力を手に入れたんだ。邪魔しないでください！！」

少年はそう言って駆け出す。

やはりいいじめか。そう思いながら一人は前に出る。花梨が非常勤だろうと、ここは男の自分が前に出るべきだと思った。

正直言って、遅い。氷室、黒島と比べれば雲泥の差だ。

軽くいなして、フルボッコ。そんな単純なストーリーを思い浮かべた。

机が、切り刻まれていた。

ふと頭をよぎって、足が止まる。あれを、こいつがやったのか？
なら――

一人の前に花梨が出て行った。彼女は懷から三節棍のような三つ折りの棒を取り出し、一本に組み立てる。少年の繰り出した手刀をそれで受け止めた。

「嘘だろ……」

普通、手刀なんかで金属の棒を叩けば、下手したら骨が折れる。身体強化された今でも絶対に痛い。なのに彼は涼しい顔で顰迫り合

いを演じている。

花梨は少年を押し返す。彼はよろめき廊下に置いてあるロッカーに手がぶつかった。

ロッカーが、裂けた。

「え!？」

「冗談じゃねえ……」

「邪魔をするならあなたたちも殺します!」

起き上がり、こちらに迫り来る。今度は左足で花梨の右側を狙う。それを花梨は棒で防ぐ。

花梨が防御に徹した隙を突いて、彼女をかわすと一人へと向かった。

「ちょ……!」

手ぶら。無防備。そんな状態で手刀を受けたら……。

一瞬、恐怖で足が止まった。止まらなければ避けることも可能だったかもしれない。だが、もう遅い。

一人の視界に影が現れる。それは、花梨だった。速い。

間に入った花梨は棒で手刀を防ぐとそれを押し上げる。手が上がって無防備になったところに、鳩尾に突きを繰り出した。

「うっ!」

少年は吹き飛び、床やロッカーを傷つけながら数メートル吹き飛ばぶ。

「一端、距離を置こう」

花梨は一人の手を取ると走り出した。

「どうすんだよ?」

そう尋ねる一人の手にはブラシ部分を無理矢理剥ぎ取った自在箒の柄が握られていた。ないよりはマシだろうと思いついた教室の

用具入れから失敬したのだが、おそらく一撃で真っ二つになってしまっただろう。

二人がいるのは体育館の男子更衣室である。普通教室は無意味。他の教室は鍵が掛かっている。身を潜めそうなのはトイレか更衣室くらいだった。だが、それは向こうもわかっているだろう。見つかるのは時間の問題だ。

「第一、逃げてきたけどよ、あっちに逃げられる可能性もあるんじゃないか？」

「大丈夫」

花梨の表情は真剣そのものだった。言っでは悪いが、こんな真剣な花梨は初めて見たかもしれない。

「ま、いわゆる口封じってやつ？ 絶対私たちを始末しに来るよ」

「冷静にそんなこと言われてもな」

「それにね、あの子は能力に目覚めたばかりのはず。だったら、目の前の標的の前に逃げたりしないよ」

いつだか氷室が言っていた「目覚めたばかりの破壊衝動」のことだろうか。

一人は自分と花梨を交互に指を差す。花梨は意味を掴みかねて目を丸くしていたが、やがて理解したようで、微笑んだ。

「だって、私や一人は誰かを殺したいとは思ってないでしょ？ そういうものだよ」

「……まあ、わかった。けど、どうすんだよ。まるっきり漫画の世界だな、こりゃ」

「とにかく、あの子の能力を把握しないと……」

「触れたモン全部ぶった切る。それだけじゃねえか」

「もっと細かい条件だよ。こっちが攻撃したときはどうか、体のどの部位が変化するかとか……」

「そういや、足でも攻撃してたな」

袖や裾をまくっていたのはこのためのようだ。

「私の突きが生身だったら相当のダメージだと思うけど。急所に入

ったから」

あれは、痛そうだった。それでも無事なら、防御にも使えるということか。

「問題は、意識的なのか、無意識なのか、だな」

「どう思った？」

「あ？ 何が」

「あの子の闘い方」

「あの子、ねえ……。一個下なんだけどな。とりあえず、素人、てか元々運動音痴だったんじゃない？ 能力さえなけりゃ、どうとでもなる。フルボッコだ」

そこまで言って、それでは彼をいじめていた連中となんら変わらないことに気がついた。複雑な気分になったが、彼を止めるにはおそらく痛めつけるしかないだろう。こうして負の連鎖が生まれていくのだろうか。

「うん。動きは遅いし、形もめっちゃくちゃ。そんな人が私の攻撃に反応できると思う？」

「無意識、ってことか」

「今も無事ならね」

「確かめてくるか？」

「一人が？」

「冗談よせ」

「冗談だよ」

彼女は片目を瞑って下をちよろつとだした。緊張感の欠片もない。だが、それで少しは落ち着くことができた。

「てかよお。氷室待った方がいいんじゃない？」

体育館の入り口で大きな音がした。つまり、彼は無事だったということである。ちなみに入り口は鍵が掛かっている。教官室から拝借したものだ。だが、あの能力の前にはもう数分も持たないだろう。「そんな時間はないみたいだよ」

花梨は傍らに立てかけていた武器を手取る。一人も舌打ちして

箒の柄を手を持った。何とも頼りない武器である。更衣室から出る。体育館の広い空間に出た。

「ま、この方がロッカーとか机の破片とかが飛んでこなくて有利かもね」

「攻撃が効かなきゃ意味ねえけどな」

大きな音と共に入り口の扉が両断された。隙間から少年が入ってくる。

「小癪ですね。あなたたちにはもう死んでもらわなきゃいけないんですよ」

「どうして？」

わかりきったことを花梨は尋ねる。

「邪魔なんですよ。あなたたちは僕の邪魔をする気でしょう？ それに顔も見られた。だったらもう、戻れないんですよ。僕はもう僕をいじめたやつらを殺さなきゃいけないんです」

「どうして？」

花梨は再び同じことを尋ねる。神経を逆なでしてるとしか思えない。何を思っているのだろうか。

「どうして？ どうしてもです。あなたにはわからないっ！！僕
の！ いじめられる人の気持ちなんてわからないんだっ！！」

「うん。わからない。わかりたくもない」

言いすぎだ。一人は思った。

彼の怒りに満ちた、それでいて悲しそうな表情が一人の心に突き刺さる。一人自身、いじめたことも、いじめられたこともない。いじめに遭遇したこともない。だが、だからこそ彼の心境は計り知れなくて、膨大で、怖かった。どうしたらこうまでなるのだろう。

「わからないから、私は君を止めるよ」

滅茶苦茶な論理で、彼女は少年に立ち塞がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5361y/>

偶然壊された世界で

2012年1月13日14時50分発行